

スワヒリ形成史論－風土と文明

宮 本 正 興*

「町々は、その富をインド洋貿易に負っていたが、依然アフリカ的性格を残していた。光は東方から来た。しかし、それはアフリカの夜明けだったのである」

(G. マシュウ)⁽¹⁾

目 次

- (1) はじめに
- (2) ことばと民族の形成 I (古代・中世期)
- (3) ことばと民族の形成 II (近世以後)
- (4) 社会生活
- (5) 文学的感性
- (6) 社会階層－特に奴隷の位置
- (7) むすび

(1) はじめに

上ナイルからザンベジ川まで、大湖地方を中心とする農牧民文化の領域は、一般に「東部アフリカ」と呼ばれる。より詳しく述べるならば、大陸東部をほぼ南北に縦断する大地溝帯西縁以東の領域を中心に、南部のザンベジ川流域を加えた地域のことだ。そこは北緯4度から南緯27度にまたがる。現在、独立国家としては、タンザニア(旧タンガニーカとザンジバルの連合)、ケニア、ウガンダ、モザンビークが属する。だが、本稿の目的のためには、これらに加えて、ソマリア、特にその海岸地方を視野に入れておく必要がある。以下で明らかになることだが、北はソマリアから、南はモザンビークまで、それらのインド洋沿岸地方は一つの独特な歴史単位を構成してきた。

筆者は30年以上も前に「スワヒリ文学の発生と展開－歴史と文学」と題する一文を発表し、この地域に独特な歴史単位が形成される経緯について、文学的な風土醸成との関連で最初のスケッチを試みた。⁽²⁾ 本稿では、その後の臨地調査な

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

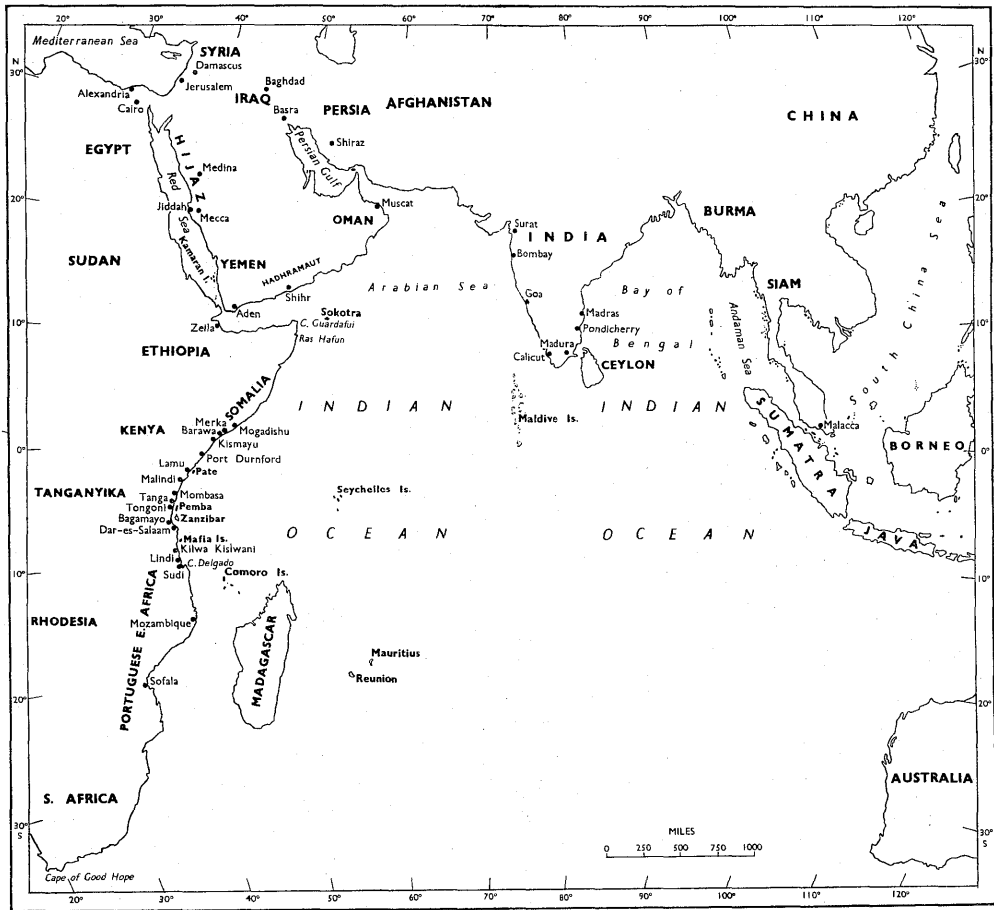
どで得た知見をも踏まえて、その文明史的な意義について再考してみたい。その際、特に、ことばと民族の生成発展過程に注目しつつ、通史的な叙述の中に、とりわけて、文学的な感性と想像力、社会における女性と奴隷の位置や役割を通して、そこから窺われる時代の思潮を把握したいと考える。

さて、「東部アフリカ」の内陸部は、暑く湿潤な、真の熱帯性の気候を示している。そこは、ナイル川の浮漂草塊や、家畜にナガナ病を、人に眠り病を伝染させるツェツェバエの棲息のために、陸路での到達には非常な困難が伴う。しかし、その他の地域は、インド洋から吹き寄せる季節風はもちろん、年間を通じての風の影響下にある。したがって、海上の道を利用すれば、到達はそれほど困難ではなかった。インド洋の、ことに西域ではモンスーンが、11月から3月までは南西方向に、5月から9月までは北東方向に吹く。このモンスーンは、「ヒッパロスの風」とも言われ、その名のローマ人船乗りが紀元45年に、その存在を報告していたものである。

アラビア半島東南端オマーンの住民は早くから海上冒険に乗り出し、大三角帆の木造船ダウで、このモンスーンに乗って東部海岸地方に往き来していた。ここでは、商品の貯蔵、住居の確保のため、生活の安全のため、また帰路の食料確保のために、現地のアフリカ人と親交を結んだ。

東部海岸地方の拠点の一つはザンジバル島であった。総面積1,658平方キロ。佐渡島の約2倍。年平均気温30度、年降雨量1,600ミリ、現在は旧タンガニーカ(それより以前は、ドイツ領東アフリカと呼ばれた)と連合して、タンザニア連合共和国の一部となっている。そのザンジバル島からインドのボンベイまでは4,000キロ。歴史上、ユーラシアの人々のうちでも、航路を開拓して、西部アフリカへはヨーロッパ人が、東部アフリカへはアジア人が最初に到達したのは納得できることである。

本稿では、ソマリア、ケニア、タンザニア、モザンビークの海岸地方全体を指して、東部海岸地方(あるいは、単に海岸地方)と総称することになる。この海岸地方は、広がりには微妙な差異を含みながらも、いくつかの名称で呼ばれてきた。まず、紀元1世紀頃のアラブ人はソマリア、ケニア、タンガニーカの沿岸のことを「アウサン」(Ausan)と呼んでいた。「アウサン」とは、紀元前600年頃に滅んだ南部アラビアの国家のことであった。これは、ギリシア・ローマの歴史地理学者の用語で、「アザニア」(Azania)と呼ばれてきたものとほぼ重なる。「アザニア」とは、ソマリアからモザンビークの海岸地方までを指し、その語源はアラビア語の *ajem*、つまり「非アラブ・異教徒・野蛮人」の意である。一方、ギリシ

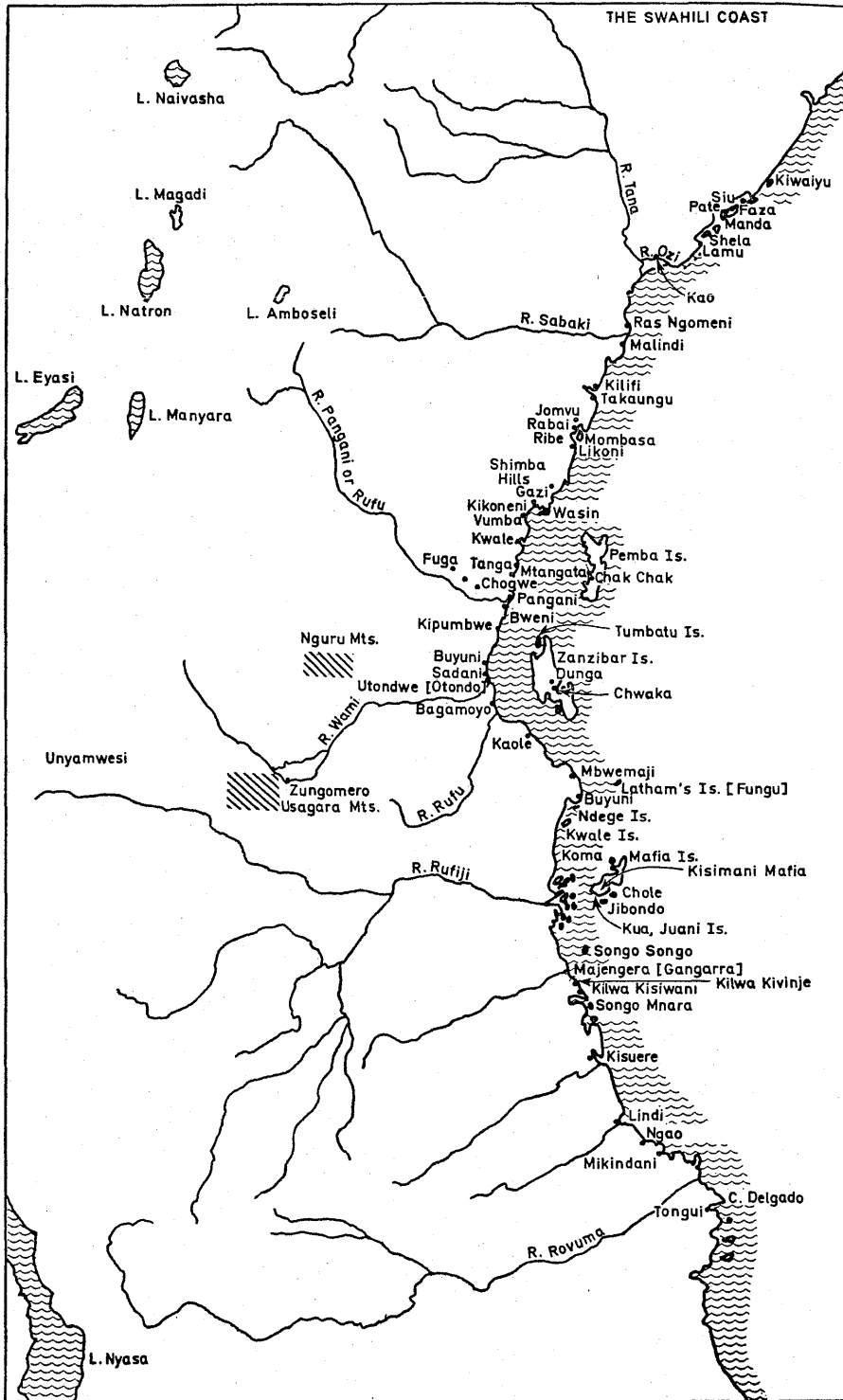


地図1 環インド洋概念図 (出典/G.S.P.Freeman-Grenville, 1962)

アの地誌家は、ソマリアからタンザニアまでの海岸地方を、「ジンギス」(Zingis)、あるいは「ジンギオン」(Zingion) と命名、アラブ人の著述家は「ザンジ」(Zanj) と呼んだ。6世紀にインドへ航海したエジプト人も、東部海岸地方のことを「ジンギオン」と呼んでいた (Zingionとは、おそらく、Zanjと同じく、ペルシア語起源であろう。『アベスタ』に zanga とある。「くるぶし、足首」の意。シーラーズの女たちが多産を祈願して、足首に鈴を付けて踊るダンス msanja と関係があるとされる)。(3) いずれにせよ、この海岸地方は、太古の昔から、孤立無援、人跡未踏の辺境であったわけではない。

G. マッシュウによれば、海岸地方の歴史は次の五つの時期に分けられる。(4)

①石器時代直後。小さな交易町の存在。②(5世紀～12世紀)不確定の時代。インドの影響が東アフリカにもあっただろう。中国の影響がインド洋に及び始め



地図2 アフリカ東部海岸地方 (出展/C.S.Nicholls, 1971)

ていた。③（12世紀～16世紀初め）イスラーム教徒がインド洋交易の主導権を握る時代。海岸諸都市の成立は12世紀のこと。16世紀に繁栄の頂点。④（16世紀～17世紀初め）ポルトガルの征服時代。⑤（1637年から1810年まで）スルタンの支配する小国家が現れる。ポルトガルへの反乱。小さな町々が復活し、イスラームを奉じ、スワヒリ語を話した。他方、G.S.P.フリーマン-グレンビルも、次の五つの時期に区分している。⁽⁵⁾ ①アル・ジャーヒリーヤ（無明時代、イスラームの用語に倣うが、預言者の生誕後にも若干及ぶ）②中世（キルワなどの都市国家が栄えた）③ポルトガル期（この期間中にスワヒリの独立意識が強まる）④スワヒリ期（オマーンとザンジバルのサイド・サイドの治世期、1804～1856）⑤地域分割と西洋列強による支配の時代。

こうした時代区分に従えば、本稿の主な対象は、①と②の時期、およびある程度まで③の時期に及ぶ。ただし、これら初期の時代においては、中世アラブの資料の他は、アフリカ側には独自の記録文献が存在しない。本稿の後半で「社会生活」や「文学的感性」を扱っているが、そこではもっぱら、アラブ人著述家の資料、ポルトガル人来訪以後のヨーロッパの資料、そして18世紀以降に現れるスワヒリ語の文献に依拠するほかない。

さて、「スワヒリ」(Swahili)とは「海岸」を意味するアラビア語 *sahil* の複数形 *sawāhil* に由来し、これに属格接辞が付いた形である。したがって語形全体は「海岸の(住民)」といったほどの意味である。この語詞が初めて現れたのは、イブン・バットゥータの口述録（『都市の不思議と旅の驚異を見る者への贈り物』1357年。一般に、『三大陸周遊記』⁽⁶⁾といわれる）で、そこには、*Bilad al-Sawāhil, arḍ al-Sawāhil*「スワヒリ人の土地(国)」とある。それは、おそらく現ペンバ島かザンジバル島、もしくはモンバサ島の対岸地域、あるいはモンバサ島からモガディシュにかけての、ごく限定された地域を指していたものと推定される。現在、スワヒリ海岸地方（「スワヒリ」の語源を考えれば、この言い方は完全なトートロジーである）といえ、一般には、ソマリア南部のキスマユ辺りからザンベジ河口のソファラ辺りまで、南北約2,000キロ、奥地へわずか20キロ幅の細長いベルト地帯を指している。これは、ほぼ10世紀のアラブの地理学者マスーディの言う「ザンジ人」の国と重なる。マスーディは次のように書いている。「これらザンジ人の集団は長さ700パラサング（約3,500キロ、アフリカ岬からモザンビークまで）の海岸線にいた。その南端はソファラで、これはオマーンとシーラーフの船が到達する最も遠い地点である。」⁽⁷⁾

アラブ人は、元来、アラビア半島南岸域に住む住民を「スワヒリ」と呼んでい

たらしい。⁽⁸⁾しかし、この用語は、後に、特にアフリカ東部海岸へ移住したアラブ人を指して使われるようになった。当初、この用語にアフリカ人は含まれなかったが、アラブ人との混交が進み、アフリカ人がイスラーム化するなどして、アフリカ人の中にもこの名称に含まれる者が出てくることになる。

町々の交易の歴史は古い。その古さ、その広がりを示すものとして、海岸地方から出土する鑄貨がある。⁽⁹⁾ 鑄造された場所は、ヘレニズム時代のギリシア（紀元前3～1世紀）、パルチア（カスピ海南東の古代国家。紀元1～2世紀）、そしてローマ、ビザンチウム、その他アラブ・トルコ諸国、中国、セイロン、安南、南インドに及び、さらにキルワ、ザンジバル、モガディシュなどの地元が含まれる。地元の鑄貨の中で一番古いものは、1277年から1294年までキルワを統治したスルタン（アル・ハッサン・イブン・タルウト）の時代のもので、インドやペルシアの様式に倣い、アラビア文字が刻まれている。これらの事実は、東部海岸地方が、環インド洋世界、そして紅海を通じて地中海諸国とも繋がる一つの広大な経済単位を構成していたことを示している。

鑄貨のほかにも、インド洋貿易の広がりを示す証拠は豊富にある。たとえば、ペンバ島からは中世の陶器が発見されたが、これはインドの古代都市で発見されたものとの関連が認められている。ペンバ島では、ウマイヤ朝の貨幣も発見された。もっと南方のソゴ・ムナラの廢墟からは、ペルシア地方に由来する、上薬をかけた焼き物の破片、ビルマやシャムから運ばれた石の道具、紅玉髓、琥珀、水晶、黄玉などの宝石片、さらには宋末期から明初期にかけての中国製の陶磁器が大量に出土している。

以下では、通時的な観点から、東部海岸地方と外部世界との接触の一端を振り返っておこう。まず、最も古くは、古代エジプトのハトシェプスト女王（紀元前1490～1468）やトトメス三世（紀元前1490～1436）などが、アフリカの内陸国プント（Punt）と交易したという記録が象形文字資料にある。プントとは、一般に、紅海南端、現在のソマリア北部海岸にあったとされるが、詳細は不明である。プントの語形を、現在のスワヒリ語で「海岸」を意味する *pwani*、あるいはバンツー系諸語の多くで「人々」を意味する基本形式 *bantu* と関連させて解釈する立場があるが⁽¹⁰⁾、両見解とも採用はできない。紀元前の古い時代に、バンツー系諸部族が東部海岸地方まで移動していた証拠がない。次に、ヘロドトス（紀元前484～424）の記述がある。⁽¹¹⁾ 彼は、エジプト第15王朝、ネコス王（ネコ二世 紀元前664～594）の事業として、フェニキア人のアフリカ周航について言及している。だが、それを裏付ける証拠はなく、ヘロドトス自身が信じられない

と記述しているほどだ。インド洋を初めて航海したヨーロッパの船乗りは、ギリシア人のスキュラックス (Scylax) だといわれる。これは紀元前 510 年のことで、彼はインダス河口から紅海までを航海した。その後、アレキサンダー大王の水先案内人が、紀元前 327 ~ 26 年にインダス河口までを往復したという記録もある。そして、プトレミー三世 (紀元前 247 ~ 221) の頃には、ギリシアの船が象牙を求めてアフリカ岬の先端グアルダフィ付近まで、初めて南下したらしい。

以上は紀元前の史実として記録されているが、ほかにも考古学や人類学などの証拠から、インド人、フェニキア人、アッシリア人、ヘブライ人などが海岸地方へ到来していたものと想定される。アッシリア人の影響として海岸地方の妖術や医術がシュメール・アッシリア様式に類似しているといわれる。ヘブライ人はコモロ諸島とマダガスカルに定着したと見られ、そこにはヘブライ様式の風習が残存しているほか、固有名にヘブライ起源のものが見られるという。彼らは、飾り玉や布を運んできて、香料、象牙、奴隷などを持って帰った。

紀元 150 年頃には、アレキサンドリアのギリシア人プトレミーが『地理書』 (*Geographia*) を書いた。現存するものは、その後に修正を加えられており、紀元 400 年頃の知識の集約だといわれる。彼は自分では旅行しないで、何人かの情報提供者を利用した。インド洋航海に詳しい人物や、実際にアザニアへ旅行した商人などの話を書き写したのである。他方、アラビア半島のカリフ国や低ユーフラテス川の鉾山で働いた奴隷は「ザンジ」と呼ばれた。「ザンジ」とは、元来は、アフリカ人と東部海岸地方に住みついたペルシア人やアラブ人との混血であった。すでに紀元前 293 年のペルシアの碑文に「ザンジ」なることが記載されている。ペルシア人やアラブ人は、「ザンジ」に相当な偏見を抱いていたようで、9 世紀頃になっても、「ザンジ」の国は広大で、そこに生えている植物は色がみんな真っ黒であるとか、そこでは、誰でも必ず疥癬にかかるなどと考えられていたという。

東南アジアとの関係も見逃すべきでない。複雑で雑多な環インド洋地域の歴史の一体性については、早くから指摘されてきた。G. マシュウは、アフリカと反対側に位置するマレー半島の海岸地方の考古学的調査の結果から、マレー半島と東アフリカ海岸地方の歴史に共通のリズムが存在することを確信したほどである。⁽¹²⁾ マレー人は東部海岸地方に、ヤシの木とそれから生じる一切の道具 (ヤシの実の匙、おろしやすりほか)、舷外浮子 (フロート) のついたカヌー (スワヒリ語で *ngalawa*) などをもたらした。ジャワ・スマトラ人は、945 年に無数の船隊を組んで到来し、アラブ人からカンバロー島 (ザンジバル島、あるいはペン

バ島と言う説が有力であるが、マダガスカルだとの説もある)を略奪しようとして失敗したという(この略奪航海は1年間続いた)。彼らは、カンバロー島から6日のところにある二、三の島の略奪には成功した。彼らは、12世紀半ばまで東アフリカと交易し、大陸内部にも交易基地を設けたと思われる。ジンバブエ遺跡からはインドネシアで生産された飾り玉が見つまっている。

中国人も海外への冒険航海に遅れてはいなかった。早くも紀元25年、後漢時代に中国の船が紅海に現れている。10世紀以前に、中国はアラブ人と定期交易を開始していたらしく、『酉陽雜俎』(863)には、おそらくマサイと思われるアフリカ人とアラブ人との交渉が記されている。『諸蕃誌』(1178)には、「海中に島あり、そこには多くの蕃人がある。彼らは、身体は黒色で、縮れ毛を持つ。彼らは食物でおびき寄せられ、捕らえられ、奴隷としてアラブ諸国に売られる。そこでは、非常によい値で売れる。門番として雇われ、肉親の下に帰りたいという希望がないといわれる」とある。⁽¹³⁾ この島とは、先のカンバロー島と同様、マダガスカルとかペンバ島を指しているとの説があるが⁽¹⁴⁾、確かなことは分からない。

15世紀には、明の皇帝が探検隊を送り、第5回目の航海でケニア海岸まで行ったし、マリンディのスルタンが中国皇帝にキリンを贈ったという話もある。おそらく、そのキリンは、直接に皇帝に渡されたのではなく、ひとまずベンガルあたりに届けられていたものであろう。⁽¹⁵⁾ インドとの交渉も古い。ジンバブエ産の金が、インドへ運ばれていたし、アフリカ産の象牙が、インドで大量に消費された。キルワの廃墟からはキャンベイ産のビーズ玉が多数発見されている。中世の終わり頃までに、海岸地方とインドの交易は、対ペルシア湾の交易と同じほど重要になっていたことだろう。バスコ・ダ・ガマが1498年にマリンディに到着した時、その地でインド人の水先案内人を見つけたことはよく知られている。だが、大量のインド人が流入したのは19世紀のサイド・サイドの治世下であった。このオマーンの君主がザンジバルに遷都した1840年以降は特に、インド人は、海岸地方の経済的発展はもちろん、その文化・文明にも無視できない影響を与えた。インドのメロディーに合わせて、スワヒリ語のラブソングが歌われたりする。また、スワヒリ古典詩の韻律形式は、アラビア詩よりもインドの詩形式に近いという考え方もある。トルコ人の進出もあった。彼らは、1517年にカイロを占領し、30年後には、その帝国をイエメンまで拡大した。1587年と1589年に東アフリカの海上まで進出し、1590年にはトルコ人の王朝がパテ島のファザ(Faza)に成立した。

以上からも窺えるように、環インド洋の東洋諸国諸民族は、古くからアフリカ

東部海岸地方と交流し、その住民に、後背地のアフリカ人とははっきりと区別できる特質を与えたのである。

注

- (1) G. Mathew, in Roland Oliver (ed.), *The Dawn of African History*, 1961. (川田順造訳『アフリカ史の曙』1962、岩波書店がある)。
- (2) 宮本正興「スワヒリ文学の発生と展開－歴史と文学」『文学』1972年6月号、岩波書店。
- (3) C.M.Doke,1938.
- (4) G. マシュウ「ザンジの国」(ローランド・オリバー編、川田順造訳『アフリカ史の曙』岩波書店、1962)。なお、訳者は Mathew を「マッシュウ」と表記されているが、本論文では「マシュウ」と表記を改めた。
- (5) G.S.P. Freeman-Grenville, 1960.
- (6) G.S.P. Freeman-Grenville,1962 に、英訳抜粋が収録されている。B. Davidson,1964 (日本語訳がある。末尾の「参考文献」を参照されたい) にも、英訳抜粋が収録されている。なお、家島彦一氏による原典からの全訳がある。[イブン・バットゥータ『大旅行記』全8巻、平凡社(東洋文庫)、1996～2003]
- (7) 『黄金の牧場と宝の山』1947年。G.S.P. Freeman-Grenville, 1962 に、英訳抜粋が収録されている。B. Davidson,1964 にも、英訳抜粋が収録されている。
- (8) W.H. Beech, 1914.
- (9) G.S.P. Freeman-Grenville, 1959.
- (10) C.M. Doke,1938. C.M. Doke & D.T. Cole, 1961.
- (11) 『歴史』第4章42節。
- (12) G. マシュウ、1961. (上掲論文)。
- (13) 『酉陽雜俎』『諸蕃誌』とも、G.S.P. Freeman-Grenville, 1962 に、英訳抜粋が収録されている。B. Davidson,1964 にも、英訳抜粋が収録されている。
- (14) たとえば、G.S.P. Freeman-Grenville, 1966.
- (15) 15世紀初頭、鄭和による南海遠征があった。前後8回(7回と言う説もある)にわたって、南シナ海、インド洋に遠征。1412年、1416年に分遣隊が東部海岸を訪れた。

(2) ことばと民族の形成 I (古代・中世期)

15世紀末、ポルトガル人が海岸地方へ到来する以前に、中南部アフリカの海岸地方でも国家形成の時期を迎えていた。すでにイスラームの伝播があったとはいえ、当時はまだ伝統アフリカの社会が至る所に残っていたことと思われる。こ

ここでは慣例に従って、ポルトガル人来航までを東部海岸地方の古代・中世期としておこう。

東部海岸地方に関して、最初の歴史記録は『エリュトラ海周航記』⁽¹⁾（以下、単に『周航記』）に現れる。その名前は不明だが、アレキサンドリアのギリシア人が、自身の体験に基づいて、ギリシア語で書いたインド洋貿易の案内書である。紀元100年頃（あるいは、紀元60年頃という説もある）に著されたもので、紅海、アラビア、インド、セイロン、中国間の交易ルートが記されており、アフリカ東部海岸地方にまで言及している。おそらく紀元2世紀頃までに開拓された航路は、紅海からインドまで、つまり、アフリカ岬よりも北域を東西に往復するものであったから、当時としては大胆な航海だった。著者はアラブ人のキャプテンと商人を使って、アザニア海岸の最後の市場町ラプタ（Rhapta、プトレミーの世界地図にも出ている）まで南下したらしい。ラプタは、現タンザニア領のキルワ、あるいはもっと北よりのパンガニ河口付近と推定されている。『周航記』によれば、海岸地方には「海賊的な人間どもがいる。身体が大きく、各々の場所に別々の首長がいる」「アラブ人の船長や代理人が来ており、原住民と親しく、混交している。彼らは地理に詳しく、土地のことばをしゃべる」とある。インド洋貿易の繁栄と広がりの説明するこうした記述は、環インド洋諸都市間の往復運動が、実際は『周航記』よりはるか以前に遡るものであることを想像させてあまりある。

「原住民と混交し、土地のことばをしゃべる」というからには、海岸地方の商業用語の先駆となるような、アラビア語とアフリカ語の混合言語が、アラブ人の居留地付近で話されていた可能性を考えてもよいだろう。しかし、その言語は、今日の（バンツー系言語としての文法体系を確実に保持している）スワヒリ語の祖先であるはずはなく、おそらくアラビア語とハム系言語⁽²⁾の混合からなる「ピジン」語であったに違いない。『周航記』はもちろん、プトレミーの『地理書』にも、バンツー系言語の存在や、黒人については一切の記述がない。バンツー系諸部族の海岸地方への到達は、一般には6世紀、早くても2世紀以後のこととされているのである。史実として確認できる最初のアラブ人の植民は684年（680年ともいわれる）で、パテ島だった。したがって、7世紀末頃には、イスラームが東部海岸、少なくともその一部に伝播していたはずである。8世紀に入ると、アラブ人はラム、マリンディ、モンバサ、キルワなどさらに南方に拡大した。初期の人々はシーア派で、9世紀には正統派のスニー派の人々も移住を始めたらしい。伝説上、シーラーズ出身の人々がキルワやモンバサの港町を築いたのは、10世紀から11世紀頃と想定される。同時に、ペルシアやアラビアの影響がモガディシュ

(ソマリア) からソファラ (モザンビーク) まで波及した。

現在のスワヒリ語の語詞に繋がると推定される単語を最初に記録したのは、アラブの旅行家アル・マスーディであった。マスーディが、912年頃、オマーンの水夫たちとともにザンジの海を南下したことは確かで、マダガスカルまで到達したという説もある。彼は947年頃に『黄金の牧場と宝の山』を著し、たとえば、ザンジ (Zanj) の王のことを *fimi*、あるいは *waklimi* と書いている。これは、現代スワヒリ語で「王」を意味する *mfalme* (複数形は *wafalme*) のくずれた形だと推測されている。⁽³⁾ ここでマスーディの言う「ザンジ人」は、いわゆるハム系諸部族とニグロ系諸部族の両者を厳密には区別しない用語であることに注意しなければならない。彼は、単に地理的区分に触れて、ザンジ人は赤道以南に、ベルベラ人 (ソマリア海岸) とハフニ人 (アフリカ岬) は赤道以北に住むという。

ところで、キルワほか海岸地方の町々の建都伝説として、エル・ハサ (El Hasa) の七人兄弟の話がある。この兄弟とは、おそらく、当時メソポタミア南部にあった首都エル・ハサを離れた戦士の大集団の7人の指導者のことだ。その話によると、957年に、ハサン・ビン・アリとその6人の息子が7つの船隊を組んでシーラーズを出発した。彼は、鉄の鼻を持つネズミが町の城壁をかじっている夢を見、それが祖国の破滅を予兆するものと解釈したという。彼と息子たちはそれぞれの船団を組み、新しい居住地を建設するために東部海岸に向かった。こうして、モンバサ、ペンバ、キルワ、ジョハンナ (コモロ諸島) などの町が建設されたという。ハサン・ビン・アリ自身はキルワに定住した。それぞれの地で、彼らは支配者となった。キルワは、南のソファラから北のペンバまでを支配し、ハサンの息子アリーの時代には、その息子がモンバサの知事になったという。

だが、この建都伝説の大部分は、実際に生じた事件そのままというよりも、伝説的な物語であって、史実ではないとの見方もある。いずれにせよ、この伝説上の年代である957年から、ポルトガル人来航の1498年まではゼンジュ帝国期といわれる。

ゼンジュ帝国の末期、1453年にトルコ人がコンスタンチノーブルを占領し、東洋交易路が閉鎖されると、ポルトガル人はアフリカ南端を回るインド航路の発見に努めることになった。彼らが大西洋を南下し、赤道を越えたのは1471年である。とうぜん、バンツ系諸部族と出会ったはずであるが、ポルトガル人の記録はすべてが東部海岸からのものである。彼らの主な目的が対インド交易の確立であり、そこではアラブ人の抵抗が激しかったため、ソファラ、その他のモザンビーク沿岸、キルワなどの軍事的占領を必要とした。くわえて、内陸の金鉱、

銀鋌のうわさもあり、奥地探検をも促されたようだ。ザンベジ河畔のセナヤテテに交易基地が置かれたのはそのためだった。おそらく、こうした事情から、西部海岸よりも、東部海岸でポルトガル人はアフリカ諸部族といっそう濃密な関係を持つに至ったのだろう。

1498年4月15日、バスコ・ダ・ガマはマリンディに到着した。東部海岸地方の中世が終焉するその年に、彼は「緑色で、サテンの縁飾りのついたダマスク織りの着物をまとい、ブロンズの二段クッションの椅子に腰かけた」⁽⁴⁾ 当地の王と会見したのだった。1502年、ダ・ガマが第2回目のインド航海に乗り出してから、ポルトガルによる海岸地方の征服が露骨に始まった。1505年、インド総督ダルメイダの率いる船隊がキルワとソファアラとモンバサの略奪を企てた。この時、バトゥータが「世界で一番美しい町」と称えたゼンジュ帝国の首都キルワは火を放たれて陥落し、以後永久に再建されることはなかった。当時のキルワの人口は4,000、モンバサの人口は1万以上だったという。モンバサは最後までポルトガルに抵抗、そのため「戦う島」(Mvita) というスワヒリ語名が今に残っている。ポルトガルは ①ソコトラ島(紅海貿易の根拠地。香料獲得が目的) ②オルムーズ(ペルシア湾の入り口。東洋産物の世界市場) ③マラッカ(マレー半島。中国交易の西端。ベンガル湾全体の香料貿易を掌る)など三つの要所の支配を企てた。ポルトガルにとって、東部海岸地方は、以上の東洋航路の補給基地として必要だった。1510年代半ばには、ゴアを本拠地に持つ広大なポルトガル帝国がインド洋に完成していたのである。

だが、ポルトガルの海上の覇権は17世紀初めに失われた。ポルトガル人は、海岸地方へ新大陸の植物、たとえば、とうもろこし、マニオク、甘蔗などを伝えたが、このほかの点では、ポルトガルの影響はすこぶる短命だった。スワヒリ語に若干のポルトガル語彙を残したほか、ペンバ島の闘牛行事などがその名残である。

結局、ソファアラもキルワもモンバサも、ポルトガル人の本拠地とはならず、彼らは1507年に占領したモザンビークから海岸地方を支配したのだった。

注

(1) *Periplus Maris Erythrae*. 村川堅太郎訳、1993がある。

(2) 「ハム」という用語は、現在では使わない。J.H. グリーンバーグは1949年以降、アフリカ諸言語の比較研究、その分類に関する一連の論考で、「ハム」の用語とその内容を全面的に退けた。その集大成が、J.H. Greenberg, 1963である。この用語「ハム」が指す内容は、

おおむね現行の「クシュ」系言語にあたるものと考えて間違いはないが、ここでは、この新しい用語が一般に流布される以前に発表された、スワヒリ語の成立に関する一連の先行研究が使用してきた「ハム」という用語をあえて踏襲しておく。J.H. グリーンバーグの分類による「クシュ」が、そのまま「ハム」とイコールではないからである。

(3) C.M. Doke, 1938.

(4) G.S.P. Freeman-Grenville, 1962 に、ダ・ガマの航海日誌の英訳抜粋が収録されている。B. Davidson, 1964 にも、英訳抜粋が収録されている。

(3) ことばと民族の形成Ⅱ (近世以後)

ゼンジュ帝国の繁栄期に、アラブ・ペルシア人の移民が大量に到来、この時期には、旧タンガニーカ沿岸だけでなく、モザンビークにもアフリカ・アジア系の混合の「島々」が、特にソファラー帯に現れた。これらの「島々」は、共通の宗教「イスラーム」によって繋がれた。この過程で「スワヒリ人 (海岸住民)」(Waswahili) としての民族意識が醸成され、発展したことは疑いない。宗教が彼らを統一し、そのことばに影響した。ゼンジュ帝国内部、特に首都キルワでは、ペルシア・アラビアの要素とバンツウの要素の混合が大規模に起きた。イブン・バットウータの記録に「私はゼングの国のスワヒリ人の土地とクルワの都市を見たいと思ってマクディシュで船に乗った。そして我々はモンバサの大きな島に着いたが、そのモンバサとスワヒリ人の土地は2日の船旅である」とある。⁽¹⁾ R. ロイシュによれば、この文で「スワヒリ人の土地とクルワの都市」とは「スワヒリ人の土地すなわちクルワ」と読むべきであるという。⁽²⁾ そうだとすれば、1330年頃にはスワヒリ人の国がモンバサの南、つまりキルワにあったことになる。また、スワヒリ人の本拠地がキルワであったことをも示している。スワヒリ人の大部分はキルワを中心にタンガニーカの海岸にいたということだ。モザンビーク海岸にも数個の「島々」があった。

このように考えるならば、スワヒリ語はゼンジュ帝国の首都キルワを中心に発生し、キルワのスワヒリ語が他の「島々」のことばよりもいっそう普及し、最も普遍的な明晰性と文法的斉一性を獲得したと考えてもおかしくはない。キルワは12世紀頃に最盛期を迎えたが、スワヒリ語が体裁を整えたのもこの頃だろうか。『キルワ年代記』⁽³⁾ にキルワの最初の王、Sultan Ali ibn al-Husain の仇名を *Nguo Nyingi* (たくさんの着物を着ている人)、その息子の Muhammad ibn Ali の仇名を *Mkoma Watu* (人々を殺す人) と言ったとある。この解釈には異論も多いが、もし事実とすれば、当時すでに、スワヒリ語が広く普及していたことを窺わせる

ものだ。

ところで、A.C. マダンは『スワヒリ語－英語辞典』(1903)の序文に次のように書いている。「スワヒリということばは、言語的にも民族的にも、アフリカ東海岸のアフリカ的なものとの混交を意味する。人種および言語における混交の比率は無限にバラエティがある。」⁽⁴⁾ F. ジョンソンの『スワヒリ語－英語辞典』(1939)には「スワヒリということばは、非常に柔軟なもので、カンズを着ている原住民なら誰でも、あるいは単に名目上の回教徒にさえ使われている」⁽⁵⁾とある。これよりもっと広義にすぎる解釈としては、「スワヒリ人とは、スワヒリ語を話す人のことだ」との説明もある。たとえば、C.H. Stigandである。⁽⁶⁾ そうだとすれば、「スワヒリ」とは、エスニックなタームというよりは、カルチュラルな概念であるといった方がよいかもしれない。

ことばと民族の起源については、真っ向から対立する二つの考え方があつた。一つは、一元的な起源を主張するもので、スワヒリ語は、一つの純粋なバンツ系言語から発展したというものである。マインホフやレールによれば、「シラジ時代にキルワとバガモヨの間の海岸地方に、現在のザラモ族の祖先に当たるスワヒリ族がいた。彼らは商人だった。スワヒリ族は何世紀にもわたって、アラビア、ペルシア、マレー、インド、ポルトガルなどの商品を取引し、それらの言語の語彙がバンツ化した。スワヒリ族は、バガモヨとキルワの間に住むことになり、他の海岸地方諸部族と混合、今日ザラモ族という名で生き残っているションビ(Washomvi)という古いバンツ系言語部族から発展した。このションビ族がスワヒリ族の起源である」という。⁽⁷⁾(マサイ語では、スワヒリ語のことを *Enguduk ol-Ashumba* といっていることが有力な根拠とされる。マサイ語は *v* を *b* と発音する。ol はマサイ語の冠詞。A は複数形を示す)。他のバンツ系言語部族との取引によって、この言語が普及し、他の諸部族がこの言語を使用するようになったというのである。

もう一つは、上のような一元的な見解を避けて、数個の核を想定する立場で、E. スティア、W.E. タイラー、F. ジョンソンなどがこれを主張している。それによると、「スワヒリ族は単一の特別な部族から起源したのではなく、イスラーム化した海岸地方のバンツ系諸部族とアラブ人との混合から生まれた。スワヒリ族はイスラーム教徒として他の異教徒諸部族から区別され、同じ信徒であるアラブ人やペルシア人と同一社会を構成した。彼らは、バンツ系諸部族の言語に、アラビア語やペルシア語、ヒンディー語からの影響(特に語彙)を及ぼした。そこからスワヒリ語と呼ばれる柔軟な言語が現れ、交易に利用された結果、東部アフ

リカのリング・フランカとなった」⁽⁸⁾ というものである。

R.ロイシュは、後者の考え方をさらに厳密に主張しているように思われる。⁽⁹⁾ それによると、以下の通りである。①最古の中心 = Benadir 海岸 (8世紀。モガディシュ、バラワ、メルカ、およびラムなど) ②最強の中心 = キルワを中心とするタンガニーカ。ゼンジユ帝国の中核を構成 (12 ~ 16世紀)。③モンバサ、ラム、マリンディ、バラワ、モガディシュでは、大小の民族的、言語的な「島々」が形成されるにすぎず、モザンビーク海岸にも数個の「島々」があった。14 ~ 15世紀に、それらが沿岸地方に薄い帯を形成しはじめ、16世紀にその過程が完成したという。

なお、スワヒリ語の起源をラム島に想定する立場もある。クルムによれば、「スワヒリ語はラム島とその周辺、つまりラム群島に起源する。なぜなら、交易者、冒険家、逃亡者、征服者などがペルシア湾から東海岸地方に着いて、そこに定住したからである」「ラム島のアラブ人移民はバンツ系女性と結婚した。すでに彼らはバンツ語の語彙を採用していたが、自分の妻との日常生活や原住民との取引のために、それをますます助長した。彼らの妻たちは、逆に、多数のアラビア語の語彙を学んだ。その子供たちは母親からバンツ語を習い、父親からアラビア語を習い、その両者を混合した。あらゆる世代にこの過程が進み、ついにまったく新しい言語 = スワヒリ語が出来た。この言語が急速に海岸地方に普及した。豊かで、柔軟な言語であり、他のバンツ系言語と比べて文法が比較的シンプルだった」⁽¹⁰⁾ という。

だが、「ラム島はスワヒリ語の揺り籠ではない」という考え方もある。R.ロイシュがその立場である。アラブ人はラム群島へ渡来する以前に、おそらくソマリアの海岸地方に定着していたことと想定されるから、ロイシュの考えは正しいであろう。その意味で、ラム島はアラブ人の最古の居留地ではないと思われる。なぜなら、もし、『周航記』のオポネがハフーン (アフリカ岬) だとしたら、ソマリア沿岸部には、ラム島より何世紀も前に、アラブ人の居留地が存在したことになるからだ。紀元 600 年頃に、最初のバンツ語系諸部族が東部アフリカに移動し、海岸地方に定住した頃、ソマリア沿岸部には若干のハム系諸部族、タンガニーカとケニアとモザンビークの海岸には若干のサン系諸部族 (いわゆるブッシュマンのこと) がいたことだろう。バンツ語系諸部族は彼らを追放、北よりの地域では、相当程度までハム系諸部族と混合した。ゼンジユ帝国期に入って、ますます多数の内陸バンツ語系諸部族が海岸地方に引き寄せられ、彼らはイスラームを受け入れ、アラブ・ペルシア人との混交が進んだ。筆者は、ことばと民族の生成発展

について、以上のプロセスを信じるに傾く。それを物語る証拠として、今日、ラム島を含めて、ケニアとソマリアの国境付近に「バジュン」(Bajuni) と呼ばれる集団があり、そのスワヒリ語は Kitikuu と呼ばれる。これは「大陸側 (Nti Kuu) 言語」ほどの意味である。この言語が、アラビア語とバンツー系言語の混合としては、おそらくもっとも古いであろう。彼らの言語は、スワヒリ語の一方言として扱われてきたが、ラム島やパテ島、そしてソマリア沿岸地方では、Kitikuu を話す人々は Waswahili (スワヒリ人) でなく、Bajuni (バジュン人) であるという言い方がある。Bajuni は「スワヒリ」を言語的にも民族的にも対象化しており、彼らは、ほぼモンバサ以南の人々を Waswahili、彼らが話す言語を Kiswahili (スワヒリ語) と考えているようだ。

なお、18 世紀の後半までは、アラブ人が、ゲアルダフイ岬以南の海岸地方から内陸に分け入った証拠はない。マースーディは、ザンジ人は雪を知らないと書いているが、⁽¹¹⁾ これは 10 世紀のアラブ人が後背地について何も知らなかったことを示しているだろう。

以下に、北はパテ島から南はキルワ (三つのキルワ、すなわちキルワ・キシワニ、キルワ・マソコ、キルワ・キビンジェを含む) に至る海岸地方スワヒリ語の方言語彙に関する筆者の臨地調査の結果の一端を示して、今日「スワヒリ語」の名称で呼ばれている言語について、その重層的性格を別の角度から考察してみたい。⁽¹²⁾

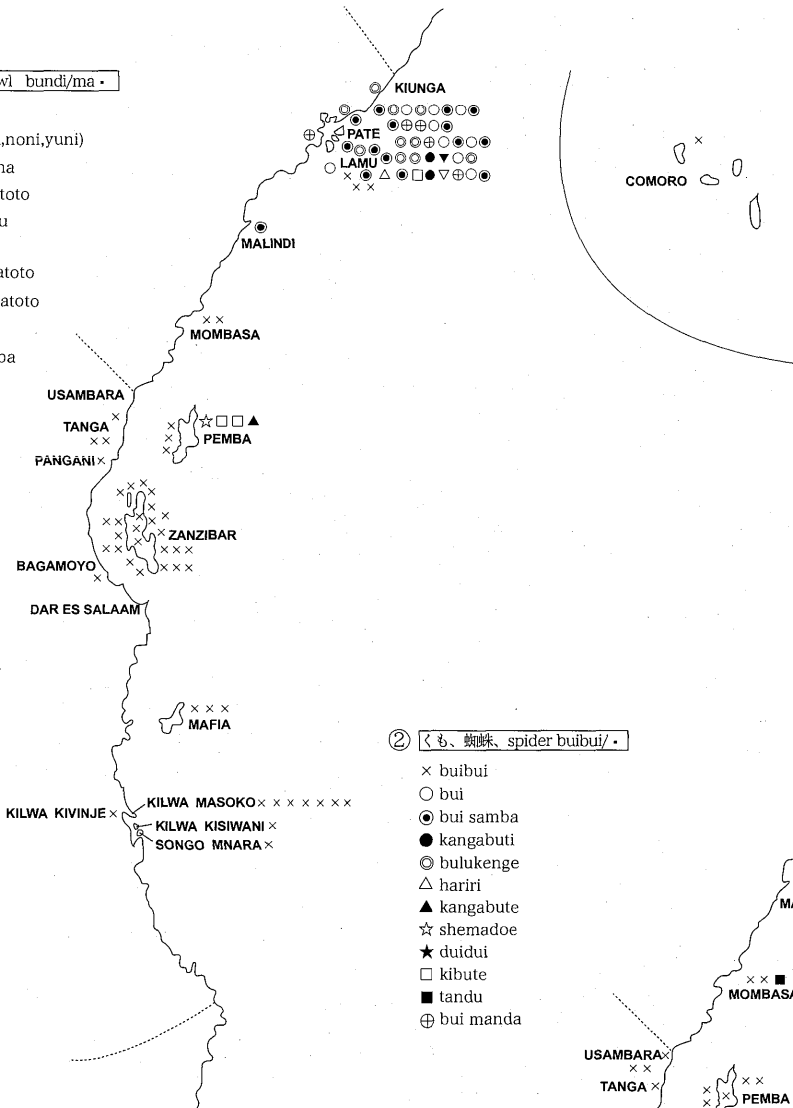
- ① 「ふくろう」(bundi) の方言語彙分布：インフォーマント総数 100 名。異なり形式 12。モンバサ以南では、コモロ諸島を含めて 52 名のインフォーマントのうち、ペンバ島 Micheweni 地区の 4 人をのぞいて、全員が bundi と回答。キウंगा・パテ・ラム地域では、異なり形式は 10 を数える。
- ② 「蜘蛛」(buihui) の方言語彙分布：インフォーマント総数 109 名。異なり形式 12。モンバサ以南では、buihui または bui が圧倒的。キウंगा・パテ・ラムの有力形式 kangabuti は、ペンバ島 Micheweni 地区に kangabute として 1 例が見られるのみである。標準形式がラム・パテまで北上している。学校教育によるものか。
- ③ 「カメレオン」(kinyonga) の方言語彙分布：インフォーマント総数 131 名。異なり形式 12。モンバサ以南の異なり形式は、kinyonga、kimalele (malele)、kimbaumbau が有力である。ただし、ペンバ島 Micheweni 地区に uvuvi/nyuvinyuvi が 3 例認められる。マリンディを含めて、キウंगा・パテ・ラム地域には kigeugeuka (kigegeuka) が有力。ほかに fungayana など。標準

形式 kinyonga が北上している。マフィア島以南では、それより以北で見られない形式 nyarubibi、narwiu/nyaruwiu などがある。

- ④ 「カマキリ」(vunjajungu) の方言語彙分布：インフォーマント総数 108 名。異なり形式 18。モンバサ以南では、vunjajungu が圧倒的。ただし、ザンジバルの一部、パンガニで pandi が見られる。パテ・ラムでも優勢である。キルワ方面には、sungujanja、laika など他の地域に見られない形式がある。マフィア島の vunjachombo も独特である。
- ⑤ 「蛸」(pweza) の方言語彙分布：インフォーマント総数 117 名。異なり形式 6。標準語の pweza が各地に圧倒的。ただし、キウंगा・パテ・ラム地区の nambo が、はるか南のトゥンバトゥ島、およびザンジバル島東南端マクンドゥチ地区に見られる。
- ⑥ 「カタツムリ」(konokono) の方言語彙分布：インフォーマント総数 108 名。異なり形式 7。マフィア、キルワでは標準語の konokono が支配的である。ザンジバル、ペンバでは koa が圧倒的。Konokono は北はモンバサまで見られる形式であり、キウंगा・パテ・ラムでは dondo が支配的である。
- ⑦ 「ナメクジ」(koa) の方言語彙分布：インフォーマント総数 57 名。異なり形式 17。Konokono はモンバサ以南で見られる。ザンジバルでは、kovu、koa が優勢で、konokono も散見される。パテ・ラム地域では、dondo が支配的で、ほかに chonro、fatuma が見られる。しかし、正しい名前を知らないか、質問の意図を取り違えた、間違っただけの回答が含まれるものと推測される。
- ⑧ 「蝶」(kipepeo) の方言語彙分布：インフォーマント総数 122 名。異なり形式 21。モンバサ以南で標準形式 kipepeo が圧倒的。ペンバ島には、kurukufu、bangala など独特な形がある。パテ・ラムの形式は、kuku、pwepwe、popo があるほか、標準形式 kipepeo も浸透している。ペンバ島の一部には、パテ・ラムと共通の形式が認められる。
- ⑨ 「とんぼ」(kereng'ende) の方言語彙分布：インフォーマント総数 82 名。異なり形式 31。あまりにも異なり形式が多く、おそらく質問の意味を取り違えているか、正しい名前を知らないなど、回答の多くが間違っただけのものであるかもしれない。標準語の kereng'ende がザンジバルに見られないことは、奇妙であり、sandarusi、tandarusi がむしろ普通に使われているのではないか。ペンバ島では kurumbiza が圧倒的に使われている。キウंगा・パテ・ラムでは、pandi が多く、「バッタ」と区別しないようである。でなければ、回答の多くが間違っているかもしれない。

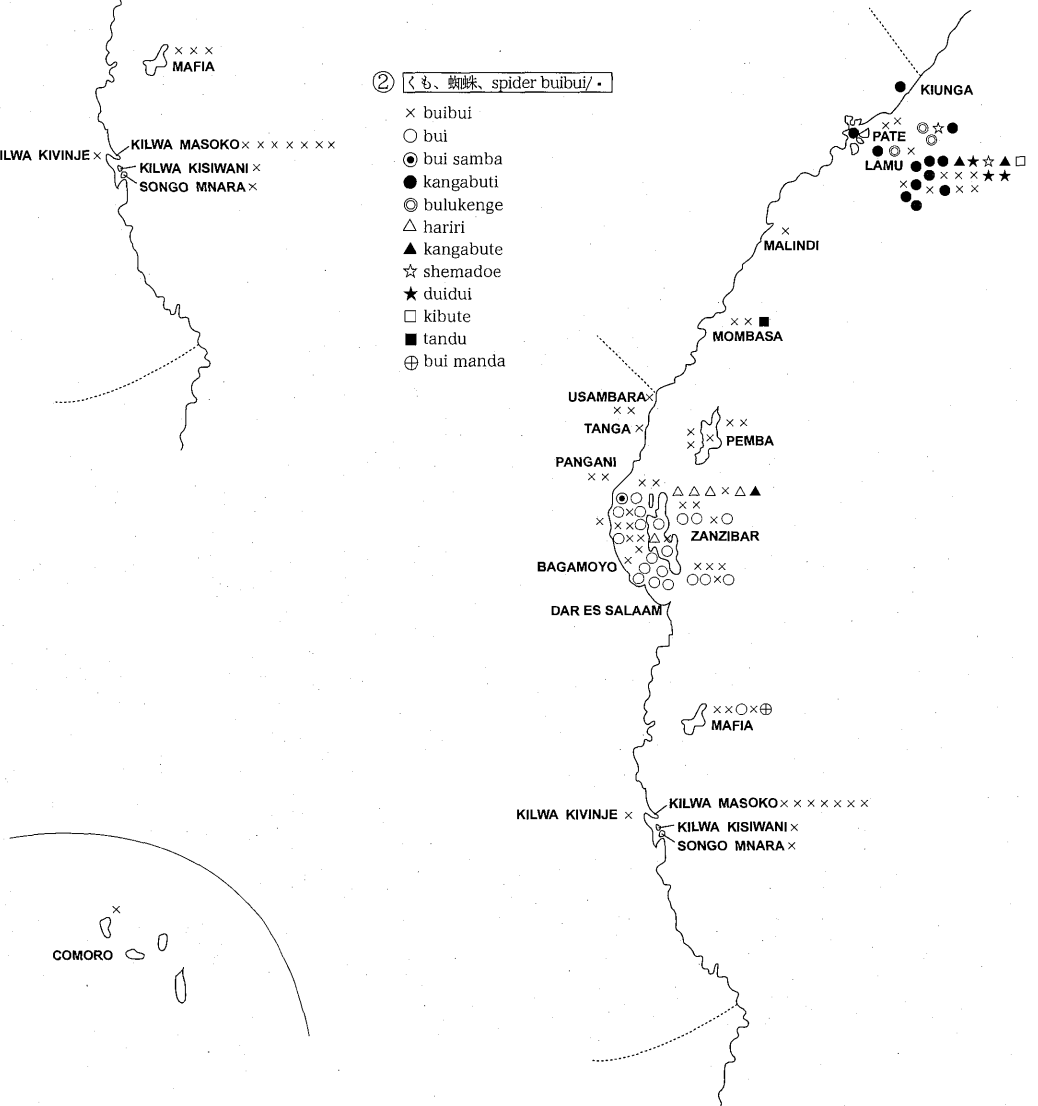
① ふくろう 泉 owl bundi/ma -

- × bundi
- nyoni (nyuni, noni, yuni)
 - wa vana
 - wa watoto
 - ⊕ iyu, juu
 - usiku
- ▼ ndege wa watoto
- ▽ shetani ya watoto
- △ jini
- ▲ popo mgomba
- baba watoto
- ☆ kipanga



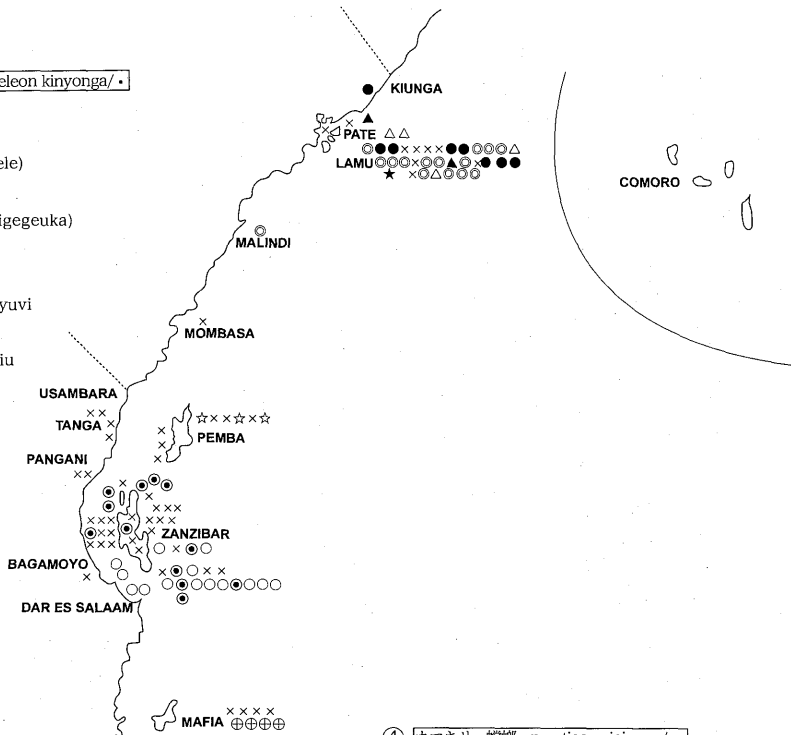
② くも、蜘蛛、spider buibui/ -

- × buibui
- bui
- bui samba
- kangabuti
- ◎ bulukenge
- △ hariri
- ▲ kangabute
- ☆ shemadoe
- ★ duidui
- kibute
- tandu
- ⊕ bui manda



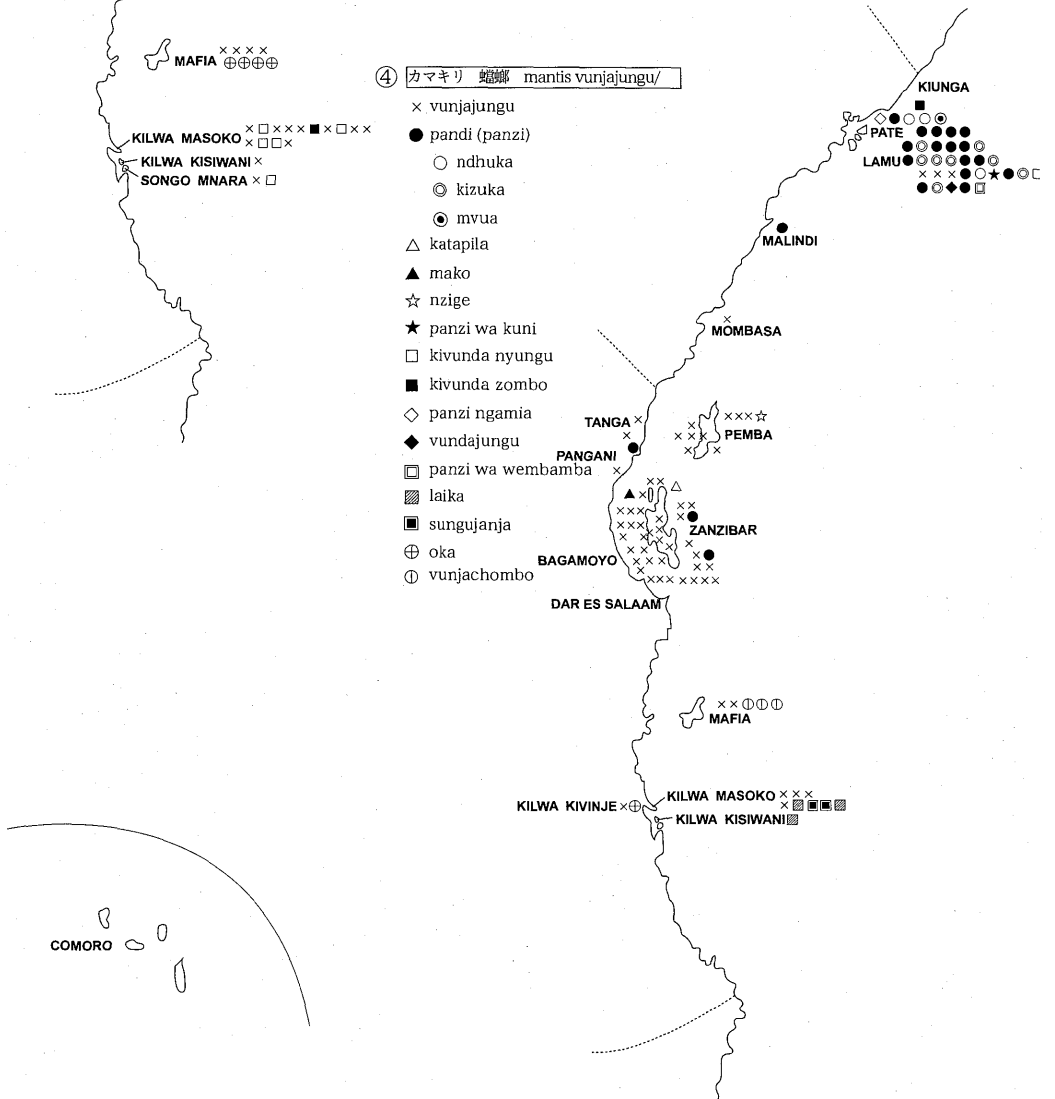
③ カメレオン chameleon kinyonga/・

- × kinyonga
- kimbaumbau
- kimalele (malele)
- fungayana
- ◎ kigeugeuka (kigegeuka)
- ▲ kideudeuka
- △ yuru, yulu
- ☆ uviuvi/nyuvinyuvi
- ★ kigegeu
- narwiu/nyarwiu
- natendelechi
- ⊕ nyarubibi



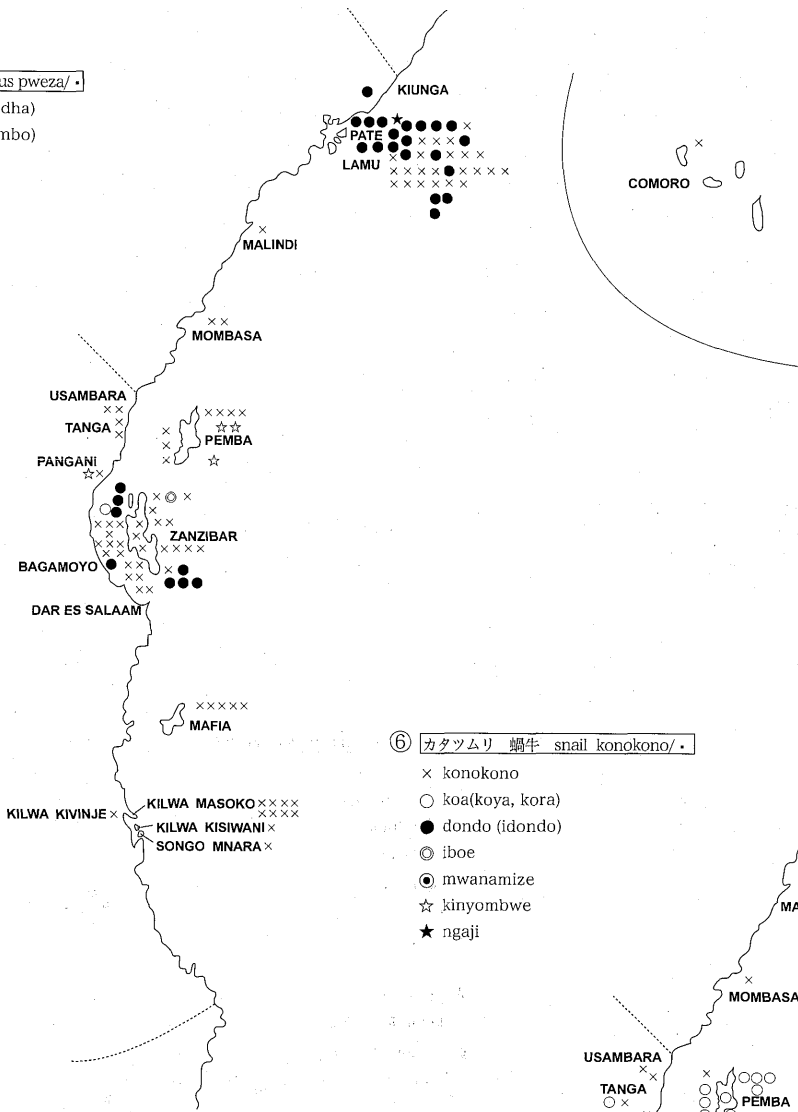
④ カマキリ 螳螂 mantis vunjajungu/

- × vunjajungu
- pandi (panzi)
- ndhuka
- ◎ kizuka
- mvua
- △ katapila
- ▲ mako
- ☆ nzige
- ★ panzi wa kuni
- kivunda nyungu
- kivunda zombo
- ◇ panzi ngamia
- ◆ vundajungu
- ▣ panzi wa wembamba
- ▨ laika
- sungujanja
- ⊕ oka
- ⊖ vunjachombo



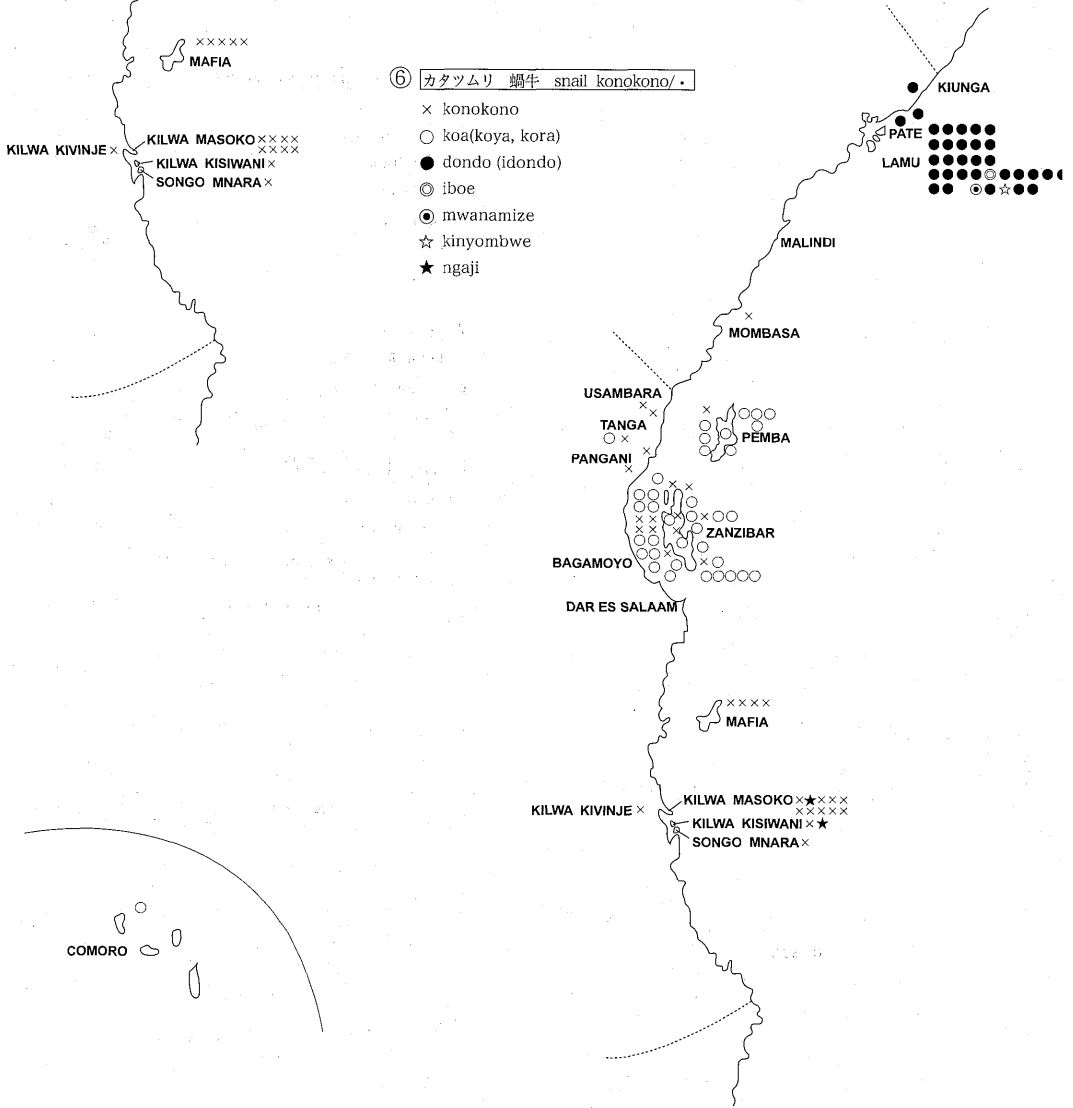
⑤ タコ 蛸 octopus pweza/・

- × pweza (pwedha)
- nambo(nyambo)
- nyambwe.
- ◎ nyambu
- ☆ ngisi
- ★ dome



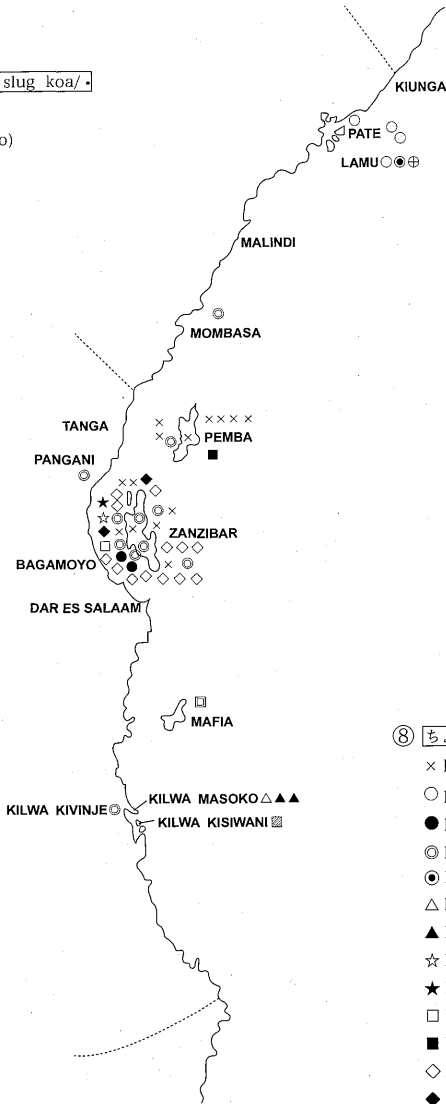
⑥ カタツムリ 蝸牛 snail konokono/・

- × konokono
- koa(koya, kora)
- dondo (idondo)
- ◎ iboe
- ◎ mwanamize
- ☆ kinyombwe
- ★ ngaji



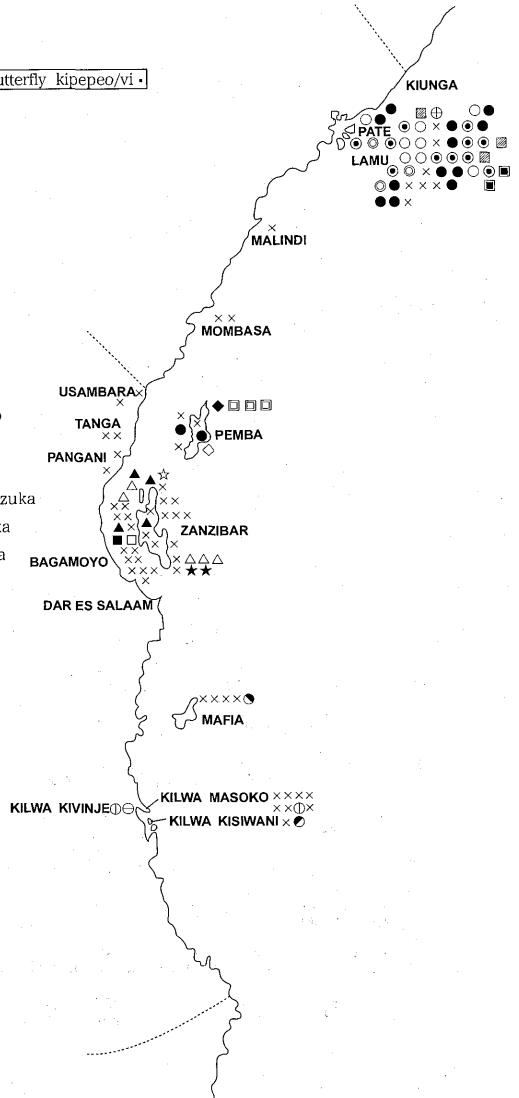
⑦ ナメクジ 蛞蝓 slug kōa/-

- × kōa
- dondo(idondo)
- nyamkui
- ⊙ konokono
- ◇ kovu
- ◆ debwa
- ☆ ruba
- ★ koya uchi
- koya mtungi
- ukwi
- chonro
- ⊕ fatuma
- △ tambaa
- ▲ dambara
- ▨ makambari
- ⊙ chunukwa
- checheru



⑧ ちょう 蝶 butterfly kipepeo/vi-

- × kipepeo
- pwepwe
- popo
- ⊙ pandi
- ⊙ kuku
- △ kitunguja
- ▲ kibangawi
- ☆ kibakombe
- ★ kitongoja
- barikoa
- barukoa
- ◇ mbaombao
- ◆ bangala
- kurukufu
- ▨ kuku wa kizuka
- popo kizuka
- ⊕ pepe nzuka
- ⊙ putiputi
- ⊖ baranguu
- vurukutwa
- kangajua



⑨ とんぼ 蜻蛉 dragonfly kereng'ende/

× kereng'ende

○ pandi

① (m)vua

⊖ mzuka

● mai

● (wa) kizuka

▲ panzi

△ helikopta

⊙ tandarusi

● sandarusi

◇ pandarusi

◆ nyembure wa mvua

● chande

○ chanja

☆ balukoa

★ dombamvua

◇ pandakichwa

◆ kurumbiza

◆ dilala

⊕ filingondi

□ kisumali

■ parare

▨ dumbwidumbwi

● unyembu

▨ ngumbingumbi

■ kitetete

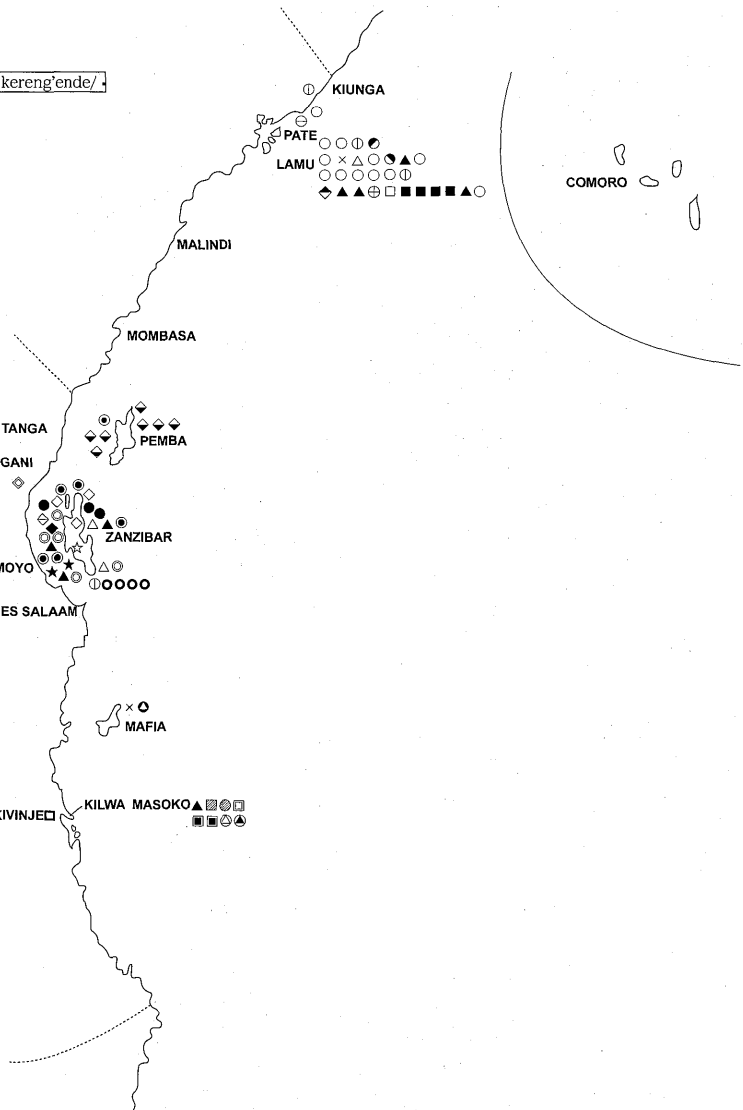
□ kipepeo

⊕ tendemaji

▲ banzi

● bambazimo

◆ dudumizi



同一の対象を指すのに、形式のことなる多くの語彙が存在することは、自然語の常であり、わが国では柳田國男の「蝸牛考」がその種の考察としてよく知られる。それでは、以上に示した方言語彙の多様性とその分布形態は何を物語っているだろうか。筆者が調査してきた海岸地方スワヒリ語の方言特殊語彙（俚言）は、魚介名、昆虫名、鳥名、動植物名等 100 種を越えるが、それらの最終的な言語地理学的解釈は時期尚早である。ここでは、これらの語彙の分布図から、誰にも看取できるような客観的事実のみを指摘しておく。まず、①ザンジバルとキルワの語彙の斉一性がきわめて高いことに気づく。②わずかに、ザンジバルの東南部のマクンドウチ、そしてトゥンバトゥ島、さらにペンバ島の一部にのみ、ラム島以北で観察される方言語彙に通じるものが看取される。その理由は、今後において説明されなければならないが、おそらく住民の移動の跡を物語るものであろうか。あるいは、ペンバ島、ザンジバル島の先住民の言語的基層が関係している

のだろう。③モンバサ島を境に、その北と南では言語的斉一性は大いに異なる。北は言語的基層の圧倒的な複雑さを如実に示している。モンバサ以北、ことにマリンディより北方において、斉一性の乱れは激しい。語彙の来源の明瞭に異なるものが多く認められる。④ペンバ島の一部、ザンジバル島の大部分、マフィア島、キルワの語彙の斉一性は非常に明瞭である。ザンジバル以南の斉一性については、19世紀以後ザンジバルの経済的・政治的覇権を考慮しなければならないが、このことは、これらの地域の本来的な言語的基層の共通性（バンツー語系）を窺わせるものだ。

以上の事実は、キルワとザンジバルが古くから緊密に結びついた政治的・経済的な一単位であったことを想定させるものである。キルワとザンジバルは奴隷取引の二大拠点であったことを思い起こそう。そこでは、奴隷として運び出された内陸諸部族を含めて、バンツー系諸語を話す住民が大半を占めていたことだろう。その意味で、ゼンジュ帝国期にあつては、おそらくキルワが、そしてキルワが勢力を失ってから、しだいにザンジバル（都市部）が言語的改新の起点でありつづけたに違いない。キルワがいつまでその地位を確保し続けたかは容易に判断できないが、19世紀以前に、その地位は確実にザンジバル（都市部）に奪われていたことだろう。ザンジバルに比べて、キルワの人口はあまりにも少なかったし、サイド・サイドの政治的・経済的覇権が、対外関係を含めてザンジバルに定着したからである。これに対して、ラム島以北の地域が東部海岸地方に対する言語的改新の起点となって、モンバサ以南にまでその影響を及ぼしたことはなさそうである。ラム島以北の方言語彙の多様性は、この地域のスワヒリ語の形成に、バンツー系諸語以外の言語、ことに「ハム」(クシュ系諸語) 的要素を加えるなど、実に多様な諸言語が干渉したことを窺わせるのである。スワヒリ語の文学(詩語)の伝統を生み出したのは、モンバサ島以北、ことにラム島やパテ島であったが、今日につながる話しことばの基礎になったのは、むしろ南のザンジバルやキルワだったと考えるべきであろう。

この点について、もう少し詳しく論じておこう。ラム島以北では、スワヒリ語はアラビア語、「ハム」語(クシュ系諸語)、ナイロ・ハム語(東ナイル諸語)、インド系言語ほかの語彙を多く吸収したことだろう。この地方はかつてシリア人が支配しており、多数のシリア語、アラム語、ヘブライ語も混じっていると考えられる。

マリンディ・モンバサ地域では、「ハム」語、ソマリア語、シリア語の要素がしだいに影をひそめ、かわりにバンツー系諸語の影響が強くなっただろう。他方、

メソポタミア、アラビア、ペルシアの影響力も強かった。さらにトルコ語、ヒンディー語、バルチ語の影響があり、オマーンの影響が顕著である。タンガニーカ・ザンジバル・キルワ方面では、ペルシア・アラビア語要素と純粹にバンツ系諸語の要素が濃厚である。他に、ポルトガル語、ドイツ語、ヒンディー語、英語からの借用も多い。この地域の諸方言は、他の諸方言より広く普及し、明晰な文法的斉一性を獲得した。

「スワヒリ語は、起源的には純粹な一つのバンツ系言語だった。当時にそれがスワヒリ語と呼ばれたかどうかは別問題である」⁽¹³⁾ というマインホフやレールに通じる考え方は他にもあるが、では、その言語は、アラブ人が到来する以前はどう呼ばれていたのだろうか。「スワヒリ」とはアラビア語での命名なのである。また、その言語は、誰によって話されていたのだろうか。スワヒリ「族」といった単一の部族が存在したとの確証はない。むしろ、今日、「スワヒリ」と呼ばれる人々の出自は、いくつもの、いわゆる「部族」に属しているか、あるいは逆に、どの部族にも出自を辿ることができないでいる。元来は、東部海岸地方のアラブ人と、厳密にはアラブの血を引くアフリカ人を「スワヒリ」と言ったのであるが、いつ頃からかその実体は曖昧になってしまった。また、ソマリアからモザンビークまで、多数のバンツ系言語が話されているが、そのどれもがスワヒリ語の母体になったとは思われない。アラブ人に奴隷として使われたアフリカ人は、いろんな「部族」の出身であったことを思い起こそう。これらが、特にザンジバル以南で、共通の民族意識を育てた「海岸住民」の中核であり、そこから一つの共通語が生まれたと考えるのが自然だろう。図式的に言えば、アフリカ人の母親とその子供たち、アフリカ人奴隷等の中から、バンツ系言語としての骨格を保持した一つの共通語（バンツ系言語要素+アラビア語要素）が生まれた。この言語は、海岸住民の活発な商業活動から、その言語的斉一性を失うことはなかった。とはいえ、居留地間の隔たりと、特定地方のさまざまな言語の存在が、この海岸語に方言差を招来したのであろう。今日のスワヒリ語は、1,000年にもわたるこうした歴史的プロセスの結果であると想定されるのである。アラビア語要素を差し引いた、原初スワヒリ語に相当するようなバンツ系言語は存在しないと考える。

バンツ系言語部族で最初に海岸地方に到着したのは、ジンバブエ、ナタール、モザンビークなどに定着したングニ系統の諸部族と思われ、ついでニヤムウェジ、ヤオなどがタンガニーカに入った（紀元600年頃）。アラブ人の多数の移民が海岸と島嶼に恒久的に住みつき、混血を繰り返したのは紀元700年頃以降かと想像される。その頃から紀元800年の間に、モガディシュ、バラワ、メルカ、ラムな

ど北よりのアラブ人居留地に、スワヒリ語の「島々」が現れていたことだろう。だが、こうした混合集団の「島々」は海岸地方のいくつかの拠点に散在したに過ぎないだろう。もっと後、現在のカメルーンとナイジェリアの国境地方を原郷土としたと推定される初期のバンツー語系諸部族が移動を開始し、やがて中南部アフリカにも進出、海岸地方の平野部に定住してから、この混合が圧倒的に進み、共通の民族意識が醸成されたといえるだろう。以前に散在した「島々」の言語がますます斉一性を高め、地域の商業用語として普及することになる。

現在、スワヒリ語の総語彙の5分の2はペルシア・アラビア語起源、5分の3はバンツー系諸語の起源であるといわれる。ここに至る経緯を再び図式的に説明するならば、アラブ人やペルシア人は、主として戦士、水夫、商人、交易人、職人だった。バンツー語系の母親は農耕・牧畜民だった。その子供たちは、戦争、航海、商業、旅行、職人の道具、文化用品のアラビア語やペルシア語を父親から、農耕、動物、飼育、食物、飲み物その他日常生活用語を母親から学んだのである。かくして、アラビア語やペルシア語の語彙と慣用語法を多く取り込みながらも、バンツー系言語としての文法を骨格に持つ、まったく新しい言語が生まれた。

その後、河川や隊商ルートに沿って、このことばは拡散、南はミキンダニ(Mikindani)やリンディ(Lindi)などを越えて、モザンビークに至り、ソファアラまで拡大した。北は、パンガニ(Pangani)とモンバサ、マリンディ、モガディシュの間の空白地を埋めた。ポルトガル人到来の頃には、このことば(海岸語=スワヒリ語)が、モガディシュからソファアラまでの海岸地方で話されていたと考えられる。後にザンジバルのスワヒリ語がよく知られるようになったのは、ポルトガルの到来と、その権力の衰退、ことにキルワ陥落以後の東部アフリカの発展形態(伝道・探検事業、対外交易・外交、特にイギリスの外交政策、そして植民地化など)が、アラビアやインドと繋がる要衝の位置にあったこの島を本拠地としたことによる。実際、1840年に、オマーンの君主サイイド・サイードがザンジバルに首都を移してからは、経済と対外関係の一切について、ザンジバルが主導権を握ることになった。クローブ(丁子)がザンジバルとペンバに導入され、以前のココナッツ栽培に取って代わり、奴隷労働力が大量に必要なようになった。アラブ人は奴隷と象牙を求めて、ビクトリア湖の南端まで進出、奴隷と象牙の取引の最盛期となった。ザンジバルとキルワは公認の奴隷市場となり、ザンジバルは世界最大の象牙市場となったのである。

注

- (1) G.S.P. Freeman-Grenville, 1962 に、英訳抜粋が収録されている。B. Davidson, 1964 にも、英訳抜粋が収録されている。
- (2) R. Reusch, 1953. 以下、ロイシュの見解は、この論文に拠る。
- (3) 日本の研究者によるアラビア語版の研究がある。西野太郎、2003.
- (4) A.C. Madan, 1903.
- (5) F. Johnson, 1939.
- (6) C.H. Stigand, 1913.
- (7) ロイシュの上掲論文のほか、G.W. Broomfield, 1931 参照のこと。
- (8) R. Reusch, 1953.
- (9) R. Reusch, 1953.
- (10) F. Johnson, 1930. 他に B. Krumm, 1932.
- (11) B. Davidson, 1964 に、英訳抜粋が収録されている。
- (12) 宮本正興、1999. このための臨地調査は、1996 年から 2005 年まで、ほぼ毎年東部海岸地方の各地で行った。
- (13) R. Reusch, 1953.

(4) 社会生活

15 世紀末までに、キルワからモガディシュに至る海岸地方には 37 の都市国家が栄えたが、それらは統一国家を形成したことはなかった。16 世紀初頭にモンバサを訪れたポルトガル人ドゥアルテ・バルボザ (Duarte Barbosa) が次のように書き残している。

「ムーア人の町があって、ボンバザ (Bombaza、モンバサのこと) という。大きい町で美しい。高くて優雅な石の家があって、白色塗料が塗ってある。キロア (注、Quiloa キルワのこと) と同様に、素晴らしい街路が通っている。王がその町を支配している。人々の肌は黒っぽく、顔は褐色である。女達は絹と金製の飾りを付けている。大交易町であって、良港を持っている。いつも多数の船が停泊しているが、それはソファラに往復するもののほか、カムベイ王国やマリンディから来たものや、ザンジバルやマフィアやペンバへ行くものがある。このモンバザ (注、ここでの綴りは Monbaza となっている) という町は、食べ物が豊かで、きれいな羊がいて、まるまる太っている。それに牛、ニワトリ、山羊がたくさんいて、米の収穫が豊かで、キビ類、ほろ苦いオレンジ、レモン、ざくろ、インドいちじく、あらゆる種類の野菜、そして良質の水がある。ときおり、大陸内部の

人々と戦争しているかと思うと、平和になっていたりする。彼らと交易して、多量の蜂蜜や蠟、象牙を得ている。』⁽¹⁾

バルボザの記録は、ポルトガル人の干渉の重圧が感じられる前の、のどかな東海岸風景を写したものである。東部海岸地方の町々は、イスラーム社会の常として、とうぜん、パクス・イスラミカ、つまりイスラームによる平和を掲げた。じっさい、1331年に訪れたキルワについて、イブン・バットウータは「住民は、宗教戦争に忙しい」⁽²⁾と書いているほどである。

イスラームでは、「ウンマ」(*umma*) という用語がよく使われる。「信徒共同体」「経典の民」ほどの意味である。その意味では、イスラーム教徒はもちろん、キリスト教徒も、ユダヤ教徒も、それぞれが「ウンマ」である。スワヒリ語で書かれた1728年の日付のある最古の叙事詩 *Chuo cha Herekali (Utenzi wa Tabuka* 「タブクの戦いの書」1,150連) でも、預言者ムハンマドがキリスト教徒の皇帝ヘラクリオスに書き送った手紙に、次のようにある。「もし、汝がイスラームに帰依して私のところへ来るならば、われわれはともに一つのウンマとなるであろう」。⁽³⁾

スワヒリ社会においても、イスラームの教えは貫かれていた。神は存在し、天国と地獄がある。最後の審判の日の到来は疑いがない。信仰が弱まれば社会は分解する。信仰がなくなれば、その現実性が影を潜めれば、生活はその理由と目的を失う。したがって、個々の人間のうちに、神と世界と自己の関係の高度な自覚を促すこと、これが啓示の目的であった。皆がアッラーの前でぬかずき、礼拝を捧げるとき、「ウンマ」の理想が実現し、王と乞食の差は重要でなくなるのだ。全イスラーム教徒は一つの共同社会を形成しており、その社会の現世的な権力はあらゆる点で宗教的権力を補助するものであった。その宗教的権力は、アッラーのことばであるコーランに存在した。したがって、教会と国家はひとつだった。「ウンマ」の理想が死後においても実現されるためには、現世においてその努力が必要であった。その最高のシンボルが、メッカへの巡礼である。あらゆる困難と失望の伴うメッカ巡礼こそ、「ウンマ」の神話に現実性を与えるものだった。

老若男女を問わず、学問と修練が勧められた。知識は、天国への道を歩む知恵となるものだった。Kusoma si ukarani. 「学問は書記になるためにあらず」。学問とは、コーラン、ハディースやその他法律、歴史、天文学についての書物を読むことだった。このほか、「ことばに注意せよ」(*Linda ulimi*)、「生計の道を求めるは、優れた行為なり」(*Kutafuta riziki ni jihadi*)、「右も左も見ずに、天国への道を歩め」(*Usione yamini wala shimili*)、「仕事を休むな、たえず祈れ」(*Usiache*

kazi, zidi kuomba)、また、「自由民は羊のように死ぬ」(Mwungwana hufa kama kondoo) との教えがあった。

イスラーム教徒としての義務である祈禱や断食を怠った場合、その罰をあがなうために貧乏人に食べ物を恵んだり (karamu, free meal)、一人、二人の奴隷を解放することもあった。また何年か仕えた奴隷を解放したり、負債に困っている所有主から奴隷を買い取ることも名誉なこととされた。

妻は家と自分の身体を清潔に保ち、主人は妻たちを公平に扱い、子供たちは両親に従い、また老人に従わなければならなかった。不従順は地獄の劫火より恐ろしいと考えられた。犬、豚、猛獣の肉は食べることが禁止され、貧乏人への施し、動物への哀れみが称揚された。

思慮分別と友情も大切だった。美德として、Adabu (礼節)、ufasaha (雄弁) が教育のあるしるしと見做された。その他 huruma (あらゆる生物に対する哀れみ、同情)、rehema (貧乏人と困窮者に対する慈善)、sadaka (施し)、pendo (愛)、pendano (相互愛)、udhili (謙遜)、haya (控えめ、恥じらい)、saburi (忍耐)、makini (穏健)、amani (安らぎ)、taa (従順)、isilamu (帰依)、kusilimu (信仰告白)、uvumilivu (忍耐)、unyenyekavu (控えめ)、wema (善行)、uzuri (素敵、美しさ)、lutufu (親切)、utamu wa ulimu (弁舌) が奨励された。さらに、uadilifu (公正)、uaminifu (正直)、usafi (純粋) が要求された。逆に、hasira (怒り)、uasi (反抗)、uwongo (嘘) などは神に背く悪魔の業と考えられた。⁽⁴⁾

スワヒリ・イスラーム社会には、それらが、たとえ「建前」としても、こうした禁欲主義 (zuhudi) への強い傾向があったといえる。それは、しばしば神秘主義 (sufiyya) にまで高まる。立派な人とは、ムハンマドに追従し、コーランの世界を信じる人のことだった。「現世と来世で楽しみを得ようとする者は、二本の綱を握る水夫のごとし。その一本はするりと、滑り抜ける」という。現世主義と物質主義を警告しているのである。

スワヒリ社会には、奴隷、自由民、貴族といった階層のほかに、男女の区別があった。女性の生活は、男性、父親、兄弟、夫の善意に完全に委ねられた。着物や食べ物を買う金は、彼らから与えられた。女性が主導権を発揮できるのは、おそらく幼い子供の養育だけだった。妻が天国へ行くには、夫の仲介が必要だった。

コーラン第4章34節に、男性のほうが女性よりも優位にあると述べられている。だからこそ、男は女性を大切にしなければならなかった。Mke wako, dada yako. 「妻は妹なり」。汝の妻を愛し、守ってやれというのである。

だが、なぜ女性は男性よりも劣るのか。それには以下の理由があるとされた。①男よりも知恵 (akili) が足りない。②男よりも現世的欲求が強い。現世の快楽を求める傾向が強い。③女は精神的にも肉体的にも弱く、誘惑に耐えることが出来ず、詐欺やペテンに屈しやすい。④女はコーランはもちろん、伝承や法の理解力が劣る(ただし、女性の聖者や学者もいた)。⑤女は男に従わなければならない。その逆は禁じられる。⑥女は男よりも結婚願望が強い(女は子供を生んで初めて社会的地位を得ることが出来た。子を産むことは女の義務であり、子持ちの女性は、多ければ多いほど尊敬された)。⑦一人の妻は理想ではあったが、多妻婚が尊重された(男にはそれだけの甲斐性がなければならなかった)。⑧コーランに拠れば、女性は結婚すべきで、独身を通すことは正しくないと言われた(保護者がなく、子供もいないのは悪徳)。⑨妻の離縁 talaka は夫の自由(ただし、熱心な信徒は離縁を良くないと考えた。「別の妻を欲するとき、汝は前の妻に対して不正義をなしていると思え」「古いベッドが最も寝心地がよい」)。⑩男には移動の自由があったが、女にはなかった。身分の高い未婚女性は、常に付き添いを連れて歩いた。

女性は慎み深く振る舞い、夫や子供など身近な者以外には、その身体をあらわにすることは禁じられた。モンバサのある地域では、13歳以上の女の子は、ベールを着けて外出しなければならないとされたという。また、大人の女性は、家で女の子たちを育て教える以外、職業に就くことは禁じられた(外出する理由がなかったし、料理や買い物は召使いにまかされた)。良家の女性はパジア (pazia 「カーテン」の意) と呼ばれる部屋(2階)にいて、ベランダから往來を見下ろし、道行く人に用件があれば、奴隷や召使いを使いに出したのである。

以上は、現代に生きるわれわれからすれば、ずいぶんと時代錯誤だし、人権やフェミニズムの立場からは何かと批判が出されよう。女性がどのように文学的に形象されているかということは、その文学を生み出した社会を知る一つの重要な手がかりとなるものだ。その趣旨から、もう少し敷衍しておこう。

スワヒリ詩に現れる最初の女性(Hawa=Eve)は、サタン陰謀と説得に負けて、禁断の実を食べ、そのためアダムとともに楽園追放となった。スワヒリ語で書かれた「アダムとイブの物語」(Utendi wa Adamu na Hawa)でも、男性は主の戒律を守るよう妻を監視しなければならないとの教えが説かれている。

パテ島のシウ出身の女性ムワナ・クポナの詩は、夫と妻の理想的な関係を説いて、女性の生き方の手本とされてきた。妻は夫のもっとも些細な欲求をも察知して、自分の望みを押し付けてはならないという。奉仕し、苦しむことこそが妻の

義務であるとされた。その詩「ムワナ・クポナの訓戒」は作者が死ぬ2年ほど前に、一人娘に与えた教訓的説教詩の代表的なものだ。イスラームの教義と実践を教え、女性の理想的な生き方を説き、信徒としての社会行動上の指示を与えている。⁽⁵⁾

そばへ来なさい、私の娘よ
おまえはまだ歳もいかず、小さいけれど
私の最後の教えを聞くがよい
おまえは、きっと従ってくれるでしょう

Negema wangi binti
mchachefu hasanati
upulike wasiati
asaa ukazingatiya.

アダムの子である人間は無にひとしい
現世は私たちのものではありません
いつまでもこの世に生き残る人は
一人もいないのです

Mwana adamu si kitu
na ulimwengu si wetu
walau hakuna mtu
ambao atasaliya.

愚かな人と出歩いてはいけません
そんな人は節度をわきまえていない
慎みのない人とは
関係を断ちなさい

Sandamane na wayinga
wasoyua kuitunga
ziumbe wasio changa
wata kuwakurubiya.

夫が身を横たえたら、邪魔をしてはいけません
傍に寄って、マッサージをしてあげなさい
それから、涼しい風を
扇で送り届ける者を欠いてはなりません

Kilala siikukuse
mwegeme umpapase
na upepo nasikose
mtu wa kumpepeya.

夫の首筋の毛を剃ってあげなさい
それから鬘を整えてあげなさい
朝に夕べに、水で洗い清め
香料を塗ってあげなさい

Mnyoe umpalilize
sharafa umtengeze
mkukize mfukize
bukurata wa ashiya.

夫の指示に従いなさい
夫が心底、休んでいられるように
道をぶらついてはいけません

Fuata yake idhini
awe radhi kwa yakini
wala sikae ndiani

夜の10時を過ぎた頃からは

saa ya nne ikasiya.

夫の値打ちを高めるようなことをしなさい
夫への賞賛が遠く、外へと広がるように
夫に義務を押し付けてはいけません
夫ができないことを強いたりして

Na bwanako mtukuze
sifa zake uzeneze
wala simshurutize
asoweza kutukuwa.

貧乏人を蔑み
その人たちを軽んじて
美しさや、富のゆえに知れ渡る人を
愛してはなりません

Sipende wenye jamali
na utukufu wa mali
fukara ukawadhili
cheo ukawavundiya.

*以上「ムワナ・クポナの訓戒」(*Utendi wa Mwana Kuponu*, 第1,6,21,31,34,45,48,62連)。テキストは、L.Harries,1962.

古典期のスワヒリ文学に現れる女性は、大別して二つに分かれる。①献身的、忍耐強い妻 ②淫らな妖婦。前者の例は、アブラハムの最初の妻ハジャリ（彼女は、ムハンマドの祖先に当たる若きイシュマイルを連れて砂漠を放浪した）、イエメンの女王ワフィラ Wafira（暴君ラシルーグーリ Ras'il-Ghuli が彼女の王国を破壊し、家族を殺戮した時にも信仰を捨てなかった）、ファラオの娘の侍女アシヤ Asiya（ファラオを神と崇めることを拒否し、アッラーに忠実であった）、ヨブ Ayubu の妻（苦難の間、ずっと忠実だった）、さらにムハンマド家の女性たち（母アミナ、最初の妻ハダイジャ、二番目の妻アイシャ、娘ファトゥマ）などである。これらの女性は、敬虔で愛すべき妻、献身的な母親、献身と貞節と美德の手本だった。また、子持ちの女性は、たいていはよく描かれている。英雄を誘惑する好色な女も登場する。ハムサ Hamsa やバイザ Baidha は、彼女たちと恋に落ち、性的誘惑に負けた男性を地獄へ陥れた。彼らは性的な誘惑に負け、そのため神の意志に背き地獄に落ちたのである。ハシナ Hasina と恋に落ちたラシディ Rashidi は、自ら聖者であり、学者であったので、身に迫る危険を察し、自ら去勢して、地獄の劫火をまぬがれたという。こうした女は、すべて悪魔の手先として描かれている。妖婦は疫病と同じく、避けるべきものだったのである。

以上、伝統的な社会での女性の生き方や社会的位置について述べてきたが、こ

のまま、このトピックスに終止符を打つわけには行かない。本論の趣旨から多少とも逸脱するかもしれないが、次のようなエピソードを紹介しておきたい。

時代は19世紀半ばのことである。1856年、オマーンとザンジバルの君主サイード・ビン・スルターン（在位：1804年11月20日～1856年10月19日）が65歳で死んだとき、彼がもうけた120人の子供のうち36人が生き残っていた。そのなかに、当時12歳のサルメ・ビンティ・サイード（1844年8月30日生まれ）がいた。サルメはザンジバル生まれで、ロシア南部出身のチェルケス人の側室との間にできた娘だった。サイード王は1840年から1851年にかけてザンジバルに長期滞在したが、この頃には西洋各国の領事館が開設され、アラブ、インド、フランス、アメリカ、イギリス、ドイツ商人などで賑わった。サルメは7歳頃に離宮から都市部にあった王宮に移り住み、都市のコスモポリタンな雰囲気になることになった。だが、父王の死後、兄二人の王権争いに巻き込まれてからは不遇をかこつことになる。味方した兄が争いに敗れた後は、一族から厄介者扱いにされ、話し相手もなくなってしまった。そんな矢先、近くに住んでいたハンブルグ出身のドイツ人青年と知り合った。二人は密会を重ね、やがて妊娠。恥辱を恐れた彼女は、英国戦艦でザンジバル脱出を決意し、アデンへ逃げたのである。この時、彼女は22歳だった。同地で洗礼を受け、キリスト教に改宗した。後からやってきた青年と結婚し、ハンブルグへ向かった。三年ほどは幸せが続いたが、不慮の交通事故で夫が突然他界してしまい、三人の子供が残されたのである。

彼女が生前にドイツ語で書き残した『アラビアの王女の回想録』(1888)⁽⁶⁾がある。なに不自由のない幼少期の生活が詳細に書き込まれている。ベランダから見える王都ザンジバルの賑わい、スワヒリ語はもちろん、アラビア語、ペルシア語、チェルケス語、ヌビア語、アビシニア語が飛び交い、奴隷女に囲まれ、色とりどりのランプの光に包まれた夜の王宮の記憶が鮮やかに描写されている。夫の死後、二度ほどザンジバルに帰郷したが、一族との和解は得られず、父王の遺産の分も認められなかった。1924年2月29日、ドイツで死去したが、遺品の袋には、ザンジバルの浜辺から持ち帰った白い砂が入っていたという。サルメ・ビンティ・サイードは、ドイツ語名エミリー・ロイテを名乗っていたが、その波乱の人生に、一人の女性としての、近代的自我の覚醒が見え隠れしているように思う。

注

(1) D. Barbosa, 1970. 原著の刊行は1512年。Z.A. Marsh & G.W. Kingsnorth, 1965 および B. Davidson, 1964 に、英訳抜粋が収録されている。G.S.P. Freeman-Grenville, 1962 にも、英

訳抜粋が収録されている。

- (2) B. Davidson, 1964.
- (3) M. Abel, 1938.
- (4) これら、およびスワヒリ文学に現れる女性については、J. Knappert, 1970 が詳しい。
- (5) 西江雅之氏による全訳がある。西江雅之、1974。ここでの引用部分は筆者訳。
- (6) E. Said-Reute, 1888, *Memoiren einer Arabischen Prinzessin*. 以下の英訳がある。
G.S.P. Freeman-Grenville (ed.), 1994.

(5) 文学的感性

ここでは、いくつかの古典期の文学、ことに詩作品を素材にして、スワヒリ社会の意識面を探ってみよう。まず、「アル・インキシャフィ」(*al-Inkishafi*) から始めよう。これは、パテ島のスルタン国の栄枯盛衰を題材にした叙事詩で、おそらく古典詩群のなかでは外部世界に最も広く知れ渡っている。よく言われることだが、この詩は、詩聖ダンテでさえ注目せざるを得なくさせるほどリアルな迫力をもって、最後の審判のテーマを活写している。G.S.P. フリーマン・グレンビルによると、「この詩は、様式の点でも、語法の点でも、ダンテやミルトンに匹敵する」という。⁽¹⁾

標題 *al-Inkishafi* は、本文8連目に出てくる *Inkishafi* (アラビア語動詞 *kashaf*, to uncover, to examine) から取られている。W. ヒッチンズはこれを「魂の覚醒」(*The Soul's Awakening*) と訳した。

全部で79連の四行詩だ。それは、スワヒリ文明の過去の栄光に対する挽歌であり、同時に避けがたい人間の死、裕福な人生の有為転変、無常を説く宗教詩でもある。現世の栄光は消え去る、何人も死ぬ、この普遍的な真理の前で、われわれはどう生きるべきかを問う、内省の詩でもある。

詩人は、現世の生活の虚栄を見抜き、現世のうつろいが死の相貌の一面であることを警告している。だが、虚無に走ることなく、現世の死を来世の生と関係づける方途をイスラーム信仰に見出すのである。それゆえ、傲慢こそが神を冒瀆する最も恐ろしい罪であることを強調、最後の審判に一切をゆだねるよう説得している。自力で生きることが可能だと奢り、神を無視する傲慢である。傲慢こそ、人間を地獄に陥れるのである。死は、厳粛な現実である。死の現実性に思えば、思想と感情の源泉、意志の根源にまで光明が指してくると訴え、神と世界と自己の関係のより高度な自覚に到達しようとするのである。「誰がために鐘は鳴ると問うなかれ、そは汝のために鳴っているのだ」という、かの有名な章句が

思い出されるのである。作者は、現ケニア領ラム島に生まれた。晩年の10年ほどの間に作詞されたものらしく、ラム島の北に位置するパテ島のイスラーム君主国の盛衰を題材にしているが、当時同地方の住民は、その栄華を記憶していたものと思われる。だが、政治的陰謀や扇動、暗殺などにより凋落、19世紀初頭には、より南方のモンバサ島のイスラーム君主（マズルイ家）、ついでザンジバル島の君主の支配下に入った。作者は叔父や父親の世代からパテ島の栄華を聞かされていたものと思われる。詩の構成は、古典詩の慣例に従い、アッラーへの讃辞、預言者とその家族、仲間の者への祈りに始まり、つぎに詩作の意図が真珠の鎖に喩えられている。これによって自分はもちろん、忠告を守る人々が一切の罪から救われて、よき生活に入ることを願っている（6～10連）。そのためには、死すべき運命を悟り、愚かな行為を断つよう、さまざまな比喩が述べられ、パテの栄光と滅亡を説くくだりで、テーマは最高潮に達する（33～54連）。ついで、正義の道についての忠告、それに従わない者を待ち受ける罰、七つの煉獄について述べられる（65～77連）。ただし、七番目のサカル（saqar）については触れられていない。通常のスワヒリ詩は、最後に祈りの章句と詩作者の名前を署名し、同時に作詩上の間違いがあれば正してくれるよう望むのが一般である。しかし、この詩は通常の仕方で終わっていない。さらに、詩作の意図がロザリオを編む行為に喩えられていることから、少なくとも99連の詩を書くつもりでいたものと思われる。それらがこの詩を未完とする理由になっている。スワヒリ語の詩は、アラビア語の詩と同様、それぞれ区切りを持ったバラバラの短詩を一組にしたもので、いわば紐でつながれた真珠とも言うべきものだ。ひとつ一つが完全なものであり、相互に交換が可能である。なお、最後の2連は他者による後世の挿入と考えられている。

煌々と邸宅は輝き
水晶と真ちゅうのランプで
夜も昼のごとく
美女と貴人が取り囲んだ

Nyumba zao mbake zikinawiri
kwa taa za kowa na za sufuri
masiku yakele kama nahari
haiba na jaha iwazingiye.

客間は語らいにあふれ
カーテンの揺らぐ後宮では
奴隷と召使の嬌声がさざめき
愉悦と歓びがいや増した

Kumbi za msana ili kuvuma
na za masturi zikiterema
kwa kele za waja na za khudama
furaha na nyemi zishitadiye.

まどろむべく横になれば
マッサージ師と扇子手が従い
美しく着飾ったおんなの歌い手たちが
やすみなく、甘美な歌をうたった

金銀財宝が誇りだったのか
富もまた戻らぬ旅に出てしまった
墓地に立つ標柱の下へと降りていき
泥と瓦礫がその上を覆う

クッションもマットレスもなく
今は狭き場所に横たわる
その肉体はいたるところ蝕まれ
墓石が上から押さえつける

頬骨は引き裂かれ
膿と血が滴り流れ
鼻腔と口からは蛆虫が這い出て
その顔立ちも美貌もわからず

廊下はゴキブリが這い
殿方の客間ではコオロギが啼く
外庭の語らいも失せ
ただ塵埃が積もるのみ

叢林と化した中庭は
雑草とつる草で入り乱れ
戸口という戸口は人を怖がらせる
ただ沈黙と闇が包み込む

Pindi walalapo kwa masindizi
wali na wakandi na wapepezi
na wake wapambe watumbuizi
wakitumbuiza wasinyamaye.

Ukwasi ungapo na tafakhuri
wakanakiliwa ili safari
washukiye nyumba za makaburi
fusi na fusize liwafusiye.

Sasa walaliye mji shubiri
pasipo zuliya wala jodori
ikawa miwili kutaathari
dhiki ya kaburi iwakusiye.

Zitukuta zao hutawanyika
usaha na damu hawa itika
pua na makanwa bombwe hushuka
haiba na sura zigeushiye.

Nyumba kati zao huvuma mende
kumbi za msana hulia ngende
yalifiye vumi makumi ya nde
kuwa mazibala yalisiriye.

Ziwanda za nyumba ziwele mwitu
ungi wa matuka na kutukutu
milango ya ndia yatisha mtu
kwa kete na kiza kilifundiye.

*以上「アル・インキシャフィ」(*Utendi wa Al-Inkishafi*, 第 37,40,41,44,45,46,52, 53 連)。テキストは、L. Harries,1962.

作者のサイイド・アブダッラー・ビン・アリ・ビン・ナシール (Sayid Abdallah b. Ali b. Nasir 1720～1820)は、ハドラマウトのタリムで1584年に出たシャイフ・アブー・バクル・ビン・サリムの系統に属する。この家系からは多数の有名な詩人が出た。この詩は、パテのスルタン国の滅亡後、1810年から1820年の間に作られたと思われる。説教的・教訓的な宗教詩で、詩自体の固有の素晴らしさから、詩人の指図に基づかない多数の写本が作られ、親類縁者、社交界で朗読されたり、モスクの財産となって、広く朗読された。この詩の全章句を暗記するだけでなく、その写本を絶えず携帯する人が多くいたという。この詩は、避けられない死についての説教詩であり、背徳行為への独白であり、パテのスルタン国の滅亡についての訓戒であり、他の宗教詩の無題材性と比較して、ユニークである。パテの廢墟の姿こそは、現世的生活の虚栄を示すものである。

太陽が天空にある時
 蜃気楼を見るがよい
 水があると叫んで
 喉の渇きし者は駆け寄るか

Au enga meto limetukapo
 wakati wa yua lilinganapo
 mwenye nyota hwamba ni mayi yapo
 kayakimbilia akayatwaye.

辿り着けば
 太陽の烈しい光でしかない
 困惑と果てなき
 後悔にさいなまれるのみ

Chenda akaona mwako wa yuwa
 mai alotaka akayatuwa
 asifidi yambo ila shakawa
 ikawa mayuto yasimsiye.

汝が執着するこの世は
 混乱のかたまりだ
 困苦と厄介と
 卑しさと貧しさに満ちている

Khasaisi zote na matakawo
 shida na shakawa likupetewo
 ni dunia siyo uipendawo
 yenye dhuli nyingi na makataye.

それは屍
 近づくは犬畜生のみ
 汝人間ならば
 犬と競うなかれ

Dunia ni jifa siikaribu
 haipendi mtu ila kilabu
 i hali gani ewe labibu
 kuwania na mbwa hutukizwaye.

わがことばに注意せよ
風前のランプを見るがよい
吹き飛ばされるのを止めることあたわず
それは消え去る

Nisikia sana nikwambiapo
roho enga taa katika pepo
haiziwiliki izimikapo
sasa mi huona izimishiye.

*以上「アル・インキシャフィ」(第16,17,18,19,28連)

人間よ
ことごとくの名声と悦楽を
享受しようとも
お前は、現世ではよそ者なのだ

Binadamu duniani
yeye ni mtu mgeni
ungaziona na shani
na furaha zote pia.

人間よ、悟るのだ
お前は旅人
波止場に停泊してはいるが
旅立ちに近いぞ

Binadamu tafakari
wewe ndiwe musafiri
mefika kwenye bandari
safari mekurubia.

現世は永続しない
腰を休めて、迎え入れてはくれない
現世は梯子のようなもの
登り、やがて(墓穴の中へ)降りていくのだ

Duniya siyo ukazi
kuketi na kubarizi
duniya ni kama ngazi
kupanda na kushukia.

世界は永続しない
それは毒にみち満ちているのだ
その苦さと甘さとを
お前は、身をもって味わってみよ

Ulimwengu haudumu
umejaa nyingi sumu
utungu na yote tamu
ni wewe wayitongea.

現世の甘き味に
注意せよ、同胞よ
苦いものが、お前の魂を犯すであろう
腰をおろし、そして悔い改めよ

Ladhati ya Ulimwengu
tahadhari ndugu yangu
yatakungia matungu
uketi na kujutia.

世界は虚無なのだ

Ulimwengu haukuwa

そこに何があろうとも	na vyote vilivyo kuwa
光線の中の影にすぎない	illa kivuli kya juwa
光は、お前のもとから逃げていくのだ	mtana kukukimbia.

*以上、Masudu Mohamadi Abdullah 作「タバラカ」(*Utenzi wa Tabaraka*, 第197,199,208,170,171,172 連)。テキストは、J.Knappert, 1967.

スワヒリ語は、ヨーロッパ人の到来以前からの独自の文字記録の伝統を有していることで知られるが、イスラーム教徒が、インド洋貿易の主導権を握り、キルワその他の海岸地方諸都市の形成・確立に努めた時代（12世紀から16世紀まで）に、知識人や詩人が大量に書き残したはずである。だが、こうした原資料の多くは、戸棚や手箱の中に鍵で封印され、忘れ去られるか、あるいは、圧倒的には永久に失われてしまった。最古の記録資料は、アラビア文字で書かれた14通の手紙（ゴアで発見されたが、1711年から1728年の間にキルワで書かれたものと考えられている）で、ポルトガル語の翻訳が付してある。古典詩の最古の写本は、先述した *Chuo cha Herekali* (*Utenzi wa Tabuka*)「タブクの戦いの書」で、ビザンツ帝国の皇帝ヘラクリオスの軍隊に対するアラブ人の勝利を歌った叙事詩である。元はアラビア語で書かれていたと思われるが、原本は残存していない。なお、18世紀の、それより早い時期と思われるものとして *Hamziya* (460 連) がある。これは預言者ムハンマドを称えるもので、アラビア語からの翻訳である。

Tenzi (*Utenzi* の複数形。北部方言では *Utendi/Tendi*。字義通りには「行為、出来事」の意) と呼ばれる多数の物語詩が残っている。歴史的、宗教的な題材が主体である。Tenziには、さまざまな区別が設けられている。*Utendi wa ushujaa* (勇気) と *Utendi wa hekima* (哲学、瞑想) はその二つである。ともに深い宗教的靈感を持ち、たいていは神と預言者を称える章句で始まる。*Tendi* の多くは、単にロマンチックで、史実とは異なる伝説に基づいているが、イスラーム史上の人物（預言者の親戚、追従者）が主要登場人物である。テーマは、勇気、恋愛、悲劇的な内容が中心である。これらの詩文学の真の価値は、おそらく即座に明らかになることはないであろう。スワヒリの詩と歴史は、相互に深く絡み合ってきた。詩人は、アラブとしての記憶を失わないよう、アラビア文字を使って（若干の補助文字を援用して）、数多くの詩篇を残した。

同胞よ、われに紙片と
よき黒インキと
選り抜かれたる
鞞ペンをよこし給え

Nduzangu pani karatasi
Na wino mwema mweusi
Na kalamu ya unyasi
Ambao yakhitariwa.

慈愛あまねき主の使徒の
アユブの業績を
アラビア語の物語から
書き写そう

Nandikie kikutubu
Hadithi ya kiarabu
Kwa habari za Ayubu
Tumwa ya Mola Rasuwa.

明瞭でなきところ
アラビア語より翻訳し
わが言語で明らかにして
皆に伝えよう

Napenda kuwakhubiri
Kiarabu kifasiri
Kwa lugha yetu thahiri
Pasiwe yasomwelea.

さすれば、皆がその意味を理解し
仲間に説明できるというもの
アラビア語を理解せぬ者
あまたいるがゆえなり

Na maanaye yuani
Kuyafasiri wendani
Kuna wangi insani
Kiarabu wasoyua.

書物に在りしこと
スワヒリ語にて説明し
語りつくすならば
わが心、慰みを得るなり

Kinuthumu kikutubu
Yalo katika kitabu
Kabadili kiarabu
Kisawahili kawimbia.

*以上「アユブの歌」(*Utendi wa Ayubu*, 第1,2,3,3a,5連)。テキストは、A.Werner, 1921/22から⁽²⁾

「魂の覚醒」(*al-Inkishafi*) など19世紀初頭に書かれた素晴らしい作品は、外部からの攻撃を潜り抜けて、海岸地方が文化的に再生したことの証拠であった。19世紀には、たとえばモンバサ出身のムヤカ・ビン・ハジ・アル・ガッサニイの一連の作品に見られるように、⁽³⁾ 単にイスラームのことだけでなく、個人の想い、アフリカでの生活を歌ったものもある。だが、一般に古典期の詩では、肉体の愛

に言及されることはない。夫婦の愛は、兄と姉の愛、母と息子の愛に喩えられることが多い。むしろ、隣人愛が尊重されるのである。風景描写も稀だ。インド洋のさざ波、珊瑚礁の美しさが詩に歌われることもない。「美」の属性は、預言者についてのみ言及された。ムハンマドの後光、天国の美、来世の美などである。詩人はすべての作品の最初と最後に、祈りの文句（*baraka* 詩を朗誦する者のために挿入される、清浄の力を持つ章句）を挿入し、同時にその詩の読者、朗誦の聞き手のための祈りの句を付け足すのが慣例だった。

一般庶民のために書かれる民衆文学、そして、詩人が自分の所属する階級、あるいはより低い階級に向けて書く知識文学の区別があった。しかし、どちらも全イスラーム教徒の統一という基本的概念が社会の根本理想として描かれ、表現されている。社会的・道徳的概念、教訓と行動の規則が与えられるのである。これこそが、信仰告白（「アッラーの他に神なし、ムハンマドはその預言者なり」）をした万人を迎え入れる開かれた社会の倫理規定だった。

詩形式の上では、「シャイリ」(*shairi/mashairi* 歌謡詩)と「ウテンディ」(*utendi/tendi* 叙事詩)の区別があった。たとえば、有名なものとして、オジ (Ozi) のワリオンゴ・フモ (1150? ~ 1200?) に捧げられた歌謡詩があったが、多くは吟遊詩人が歌の競技会で競争して作った即興的作品であった。吟遊詩人たちは、粹に気取って歩き、韻を合わせることが出来ると、誇らしげに自慢したという。詩が評価される基準は、正しく適切な語の選択、押韻の完全さ、節調技術の完全さであった。「マシャイリ」は普通、大衆の間で朗誦されてから、人気を博したものが書写された（数年経ってから、書写されるのが普通だった）。「ウテンディ」(*utendi*、ザンジバル方言では *utenzi/tenzi*) とは act play つまり、叙事詩で、出来るとすぐに書写され、大衆に流布された。聞き手の前で、楽器に合わせて一人、あるいはそれ以上の人々がともに朗誦した。E. スティアはこれをグレゴリー 13 世時代のローマの聖歌隊と比較した。⁽⁴⁾ 楽譜が用意されたいが、見つからない。

なお、スワヒリ語の散文資料は、それが書かれた時代、あるいはもっと古い過去を題材にしたものが多く、歴史文書としても有効なものが少ない。しかし、1204 年頃から 1890 年頃までのパテの衰滅までを記録した『パテ年代記』(ブワナ・キティニの口述に基づく)にしても、信憑性にかける部分が多く、その他の文献との突き合せが必要とされる。『キルワ年代記』の場合も、スワヒリ語で書かれた原本は失われ、現存するのは、後に書かれたアラビア語とポルトガル語の翻訳

にすぎない。また口頭伝承の歴史的価値にしても、たとえば『キリンディ事情』(18世紀初期に勃興したウサンバラ王国について、19世紀後半頃の伝承をまとめたもの)についても、同様のことが言える。

A. ワーナーによれば、類似した伝説がアラビアから引かれた場合でも、スワヒリ語版の方はスワヒリの伝説に基づくオリジナルなものだったという。たとえば、「ミクダド (Miqdad) とマヤサ (Mayasa) の物語」がそれで、ワーナーは「ミクダド」を扱ったアラビア語の写本を徹底的に研究したが、どの写本もスワヒリ語版とは対応しなかったという。⁽⁵⁾

この点は、他の作品でも論証できる。たとえば、W. ヒッチンズは *tendi* (叙事詩) のテーマが、預言者の生誕祭 (Maulidi, Mauludi) に際してモスクで読まれ、朗唱されるアラビア語の作品からの借用だと考えたが、L. ハリスはこれを否定して、次のように主張している。「それらは (スワヒリ語の) *tendi* とは何の関係もない。Maulidi の礼拝で聞かれることもない。讃歌や *tendi* の元をアラビアの古典詩に辿ることは不可能である。」⁽⁶⁾(とはいえ、ハリスは、たいていの *tendi* はアラビアの作品と直接の関係があることを想定している)。また、W. ヒッチンズは、スワヒリの韻律形式が *tasmit* として知られるアラブ人のものを採用していると述べたが、L. ハリスはこの見解をも退け、この形式は古典期アラブの詩人が使用したものではないと主張している。こうした問題に、最終的な結論を引き出すには、とりわけて、ハドラマウトやペルシア湾地方のアラブ民衆詩を研究する必要があるだろう。

注

- (1) G.S.P. Freeman-Grenville, 1963 in R. Oliver & G. Mathew, (ed.) ,1963.
- (2) A. Werner, 1930. (五島忠久訳『アフリカ諸言語の構造と関係』三省堂、1944)。スワヒリ語テキストは、A. Werner, 1921/22 から。ここの日本語訳は五島忠久氏による。
- (3) Muyaka bin Haji al-Ghassanyi (1776 ~ 1840)。この詩人によって、スワヒリ詩は「モスクから市場へ」運び出されたと言われる。詩集に、R. Jones & C.M. Doke (ed.), 1940 がある。また、研究書に、M.H. Abdulaziz, 1979 がある。
- (4) E. Steere, 1870.
- (5) A. Werner, 1932.
- (6) L. Harries, 1962.

(6) 社会階層—特に奴隷の位置

先述したとおり、社会の階層⁽¹⁾としては、広義には①貴族 (*masharifu*) ②自由民 (*waungwana*) ③奴隷 (*watumwa*) の区分があった。「貴族」といわれる人々の多くは、預言者の家系を誇りにしていた。彼らの役割は宗教行事、医術の実践、日常の法律相談、詩歌の朗読 (結婚式や葬式) だった。著名な詩人たちは、多くが預言者の血を引くと主張していた。詩人たちは、バンツー文化とは異なる材料から、アフリカに根ざした、真に民族的な文学を生み出したといえる。

「自由民」は、スワヒリ社会の中核だった。彼らはいかなる主人にも仕えず、誰の家臣でもなかった。自分たちの首長・頭目の配下にいたが、自分自身が指導的な家系の長だった。これに対して、「奴隷」は屋内労働や農園の耕作労働のほか、あらゆる卑しい仕事に従事した。これらの奴隷は、内陸各地からキルワやザンジバルへ運び出された者が多かった。たとえばニヤッサ人、ヤオ人、ニヤムウエジ人などである。中央アフリカ起源の奴隷は、一括して *Washambara* と呼ばれた。「内陸出身者」ほどの意味である。

以下では、特にこれらの「奴隷」に注目して、スワヒリ社会の特性を把握してみたい。

アラブ人を父に、アフリカ人奴隷を母に生まれたものは、父方の「アラブ」を名乗った。この子が女子で、「アラブ」と結婚せずに原住民と結婚すれば、彼女の子は「アラブ」ではなくて、「ムザリア」(*Mzalia*、スワヒリ語動詞 *zaa* 「生む」) から。「主人の家で生まれた者」の意) と呼ばれた。この名称は、奴隷の男子と奴隷の女子の間に生まれた子供に対しても使われた (男子の奴隷には、妻として通常は奴隷女が与えられたが、その間に出来た子供は、主人の奴隷となった。この組み合わせは、初期には稀であったが、後にますます拡大した)。したがって、「ワザリア」(*Wazalia* 「ムザリア」の複数形) と呼ばれる集団には、「アラブ」の血が混じっている者もあれば、純粹にアフリカ人である者もいた。また、主人から自由を与えられた奴隷 (「マシキニ」*Masikini*) も「スワヒリ人」(*Waswahili*) の名に含まれるようになった。のちには、ニカ人 (*Wanyika*)、ンゴンベニ人 (*Ngombeni*)、キドゥタニ人 (*Kidutani*)、ポコモ人 (*Wapokomo*) など後背地の諸部族がイスラームに改宗して、「スワヒリ」の名に含まれるようになった。「ムザリア」が「自由民」(*Mwungwana*) の女と結婚すれば、*Waungwana* (*Mwungwana* の複数形) の多くよりも、もっとアジア的な風貌の子供を生む可能性もある。しかし、この子供もやはり「ムザリア」である。母方の血は考慮に入れないからである。妾になった奴隷女が男子を産んだ場合、その妾を他人に譲渡することは出

来ず、主人の死後、その奴隷女は自由の身となった。息子は生まれた時から自由民であり、他の自由民の妻との間に生まれた兄弟と同じ地位を享受できた（そのため、アラブを名乗る混血が急増した）。自由になった奴隷は、スワヒリ語で *maula*（あるいは *mola*）と呼ばれた（アラビア語の *mawlā*、複数形 *mawālī*）。これは、ローマの *famuli* に相当した。自由奴隷は、自由になってからも元の主人の庇護を受けるなど特別な関係にあり、商店やオフィスで雇われた。

18世紀にマズルイ家系などのアラブ人が到来した時、彼らは海岸地方の「アラブ」との風貌の違いから、自らは「スワヒリ」でないことを強調し、純粋「アラブ」(*Waarabu*) を主張した。しかし、ポルトガル人は海岸地方で見た人々を一様に「ムーア人」と呼んだ。*Wazalia* や *Mahaji* (イスラームに改宗した原住民) は、ヨーロッパ人に対して、自らは「スワヒリ」だと主張した。純粋スワヒリ、つまり父親がアラブ人である者は、自らをワングアナ (*Waungwana*、信仰によって結び付けられた者) と呼んだ。したがって、「ワングアナ」と「アラブ」は同じ概念であるが、前者にはペルシア人の血が混じっている場合がある。外部の者には、アラブ、スワヒリ、ムザリアの区別はつき難いが、区別は実際には存在しており、家系図には、その区別が書き込まれている。

古典期スワヒリ文学では、スワヒリ人のことを *Waungwana*、スワヒリ語のことを *Kiswahili* ということが多い。稀に、*Ajemi*、*Ajamiya* がスワヒリ語とスワヒリ人を指して使われる。他のバンツー系言語では、*Waarabu* でない限り、海岸地方出身のイスラーム教徒は *-ungwana* を使うことが多い。コンゴ東部地域では、言語も人間集団も *-ungwana* である。フランス語では *arabisés* といっている。

奴隷は売買、貸借、賃貸し、担保に処されることもあった。しかし、収入を稼ぎ、自分の財産を所有することも出来たし、財産や金を人から借りることも出来た。主人が奴隷に俸給を支払うこともあったし、節約して、数年のうちに借金を返せる奴隷もいた。奴隷の貯金を増やしてやったり、解放に必要な金高を軽減してやったり、自由にしてやる約束を交わし、一定期間の後（だいたい10年）にじっさいに解放してやることは、主人の名誉だった。奴隷は、最後の審判の日に、身受けした主人 (*Wakombozi*) のために祈り (*kuombea*)、そして審判の天秤を主人に有利なように傾けると信じられたのである。アッラーは、人の死後には階層の差別を作らず、ただ人は功績によってのみ審判を受けると信じられたのである。

スワヒリ社会の構造とダイナミズムを理解するには、もっと「奴隷」の存在に注目する必要があるだろう。それというのも、奴隷は、社会全体の縦と横をつなぐ触媒の役割を担ったからだ。とうぜん、ことばと民族意識の生成発展にも鍵を

握るような役割を果たした。「支配層」はもちろん、「自由民」の多くは、多妻婚を実行したばかりか、奴隷女を妾にし、その間に多くの子供をもうけたからである。同時に、奴隷たちの間では、いつしか出身部族は忘れ去られるか、あるいは出自を辿ることが意味をなさなくなった。アラブ人は主な富源を奴隷売買に求めたが、その奴隷は、アラブ人と通じた内陸の首長たちが捕らえてきたものだった。

また、先述したとおり、奴隷として使われたアフリカ人はいろんな部族集団の出身だった。言語生活面で、アラビア語とバンツー系諸語（主に中央アフリカの）との合体物が、アラビア語ではなく、あくまでバンツー系の文法構造、音韻体系を保持しながら、多数のアラビア語彙やアラビア語に特有な音韻を吸収して、ユニークな発展の道を歩んだことは理由のあることであった。短絡的で、誤解を生じやすい言い方ではあるが、「スワヒリ語は、奴隷と主人との間の相互理解のために生まれた」⁽²⁾「スワヒリ語は奴隷の言語だ」「スワヒリというアイデンティティは、もはや特定部族に出自を辿ることの出来ない集団を指している」などという言い方は、東部海岸社会の成立事情の一端を象徴的に表現していよう。A.H. プリンズも「スワヒリ人」という用語は、「奴隷であった家系、血統が辿れない、職業的な地位が低い、文明化していない」といったニュアンスを伴ったと述べている。⁽³⁾

奴隷の間から一つの超部族的な共通語（バンツー系の文法、主にアラビア語からの多数の語彙、慣用語法の借用）が生まれたことであろう。海岸住民の活発な活動から、この言語が文法的な斉一性を整えたが、居留地間の隔たり、特定地方におけるさまざまな言語的基層の存在が、この海岸語に方言差を招いたと考えられる。

かつて、内陸から運び出された奴隷たちのことばや文化が、現在でも海岸地方の言語文化に（いわば化石化して）息づいている証拠にはことかかない。その一例として、スワヒリ語で語られる昔話の前口上がある。その種類は地域ごとに豊富だが、筆者の調査では、海岸地方各地で特に有力な形式として、語り手が本題に入る前に *Paukwa* というものがある。聞き手は *Pakawa* と応えるのだが、これら二つの形式句の意味を知っている人はほとんどいない。*Paukwa* とは「さあ、昔話を話そう」の意であり、*Pakawa* とは「さあ、話してくれ」の意だと説明するものが圧倒的に多かった。筆者は、以下の語源的解釈を試みている。⁽⁴⁾

Paukwa という形式には、動詞 *uka* の語根が存在し、それが語尾変化して受身の形を取っている。Pa- は場所や時間を指す主格の接頭辞である。動詞 *uka* は、現在の標準スワヒリ語ではめったに使用されることのない古形、つまりザン

ジバル島南部のマクンドゥチなどでは現在も話されるハディム方言には残存しているものの、一般には古語 (Kikae) と称される単語の一つである。その意味は、「～から去る」「～から跳び出る」「移動する」の意であり、現代スワヒリ語の *kuondoka* にあたる。したがって、*Paukwa* とは「ある場所から何かが外へ出た、その場所は空白になった、その場所にはすき間ができた」という意味になる。つぎに *Pakawa* は、先ほどの場所や時間を指す主格接辞の Pa-、動词语根の前におかれて、時制あるいは行為の前後関係などを示す接辞 -ka-、そしていわゆる be 動詞の *kuwa* から成っている。全体の意味は「その場所が、(何かの行為の後で) ある状態にかわった」ということである。

Paukwa 「ある場所から何かが外へ跳び出て、その場所が空いた」というのは、ザンジバル、あるいは海岸地方でのある種の「踊り」に言及しているものと思われる。踊り手が列の外へ跳び出た後、次には別の人がその空いた場所を占める。それが *Pakawa* (*Pakawa na mtu*) 「人が入る」というのであろう。スワヒリ語の歌の一節に、*Paukwapo pakawapo, hapana paso badali*. というのがある。「踊りの列から跳び出た者の位置は、次には別の踊り手が占める」の意である。*Paukwa*、*Pakawa* が踊り歌の一節であるとしても、どのような踊りであるのか、あるいはあったのかは定かではない。しかし、それらしいと推測できる2種の踊りを簡単に紹介しておこう。どちらも、19世紀末から20世紀にかけて、ドイツのスワヒリ学者 C. ベルテンが目撃し、その著『スワヒリ人の習慣』(*Desturi za Wasuaheli*) に記録しているものである。⁽⁵⁾ 第1は、ティンゲ (*tinge*) と呼ばれる踊り、ないしゲームで、男性だけが参加するものである。適当な間隔を置いて男たちが2列に並び、手拍子を打つ。一方の列の男たちが右足で強く地面を踏みつけた後、急にその足を高く上げ、ついでそれを急に地面に打ち下ろす。他方の列の男たちの中で、この動作を真似るのに遅れをとった者は、その列を離れ、動作を仕かける側の列に加わる。一方の列から10人の男が離れるまで歌がうたわれ、仲間を失っていく側の男たちは、*Hapa tupu! Hapa tupu!* 「ここは人がいなくなった、ここは人がいなくなった」と歌う。この踊りは大陸起源とされている。第2の踊りは、ボンドゲア (*bondogea*) と呼ばれるものである。この踊りはチャプオ (*chapuo*) という名の小型太鼓、ブミ (*vumi*) という名の太鼓、ウパツ (*upatu*) という名の鐘、およびズマリ (*zumari*) という名のたて笛が使われる。女たちは水牛の角笛ムビウ (*mbiu*) を吹き鳴らすが、踊りには参加しない。男たちは刀と棒切れを振り、円形になって踊る。やがてその中の一人が広場の中心に踊り出て、その人が去るとつぎの人が列から出て、一人になって広場の中心で踊りは

じめる。この踊りはザンジバル生まれの奴隷、つまり奴隷主の屋敷で生まれたアフリカ人 (*Wazalia*) の間で広まったものといわれる。*Paukwa*、*Pakawa* の歌が踊りの際に歌われたとしても、今あげた2種の踊りに際して直接的に歌われ始めたのかどうかは明らかでない。いずれにせよ、いわば化石化して現在につながる言語形式が、奴隷の踊り歌に遡る可能性が興味深いのである。

注

- (1) 社会階層の分析については、たとえば、J. Knappert, 1967.
- (2) たとえば、W.H. Beech, 1914.
- (3) A.H. Prins, 1965.
- (4) 宮本正興、「ザンジバル島の言語遊戯」『民博通信』第27号、国立民族学博物館、1985（宮本正興『スワヒリ文学の風土』1989所収）
- (5) C. Velten, *Desturi za Wasuaheli*, 1903. (L. Harries, 1965に収録されている)。

(7) むすび

アフリカとアジア（中東、そしてインドが主体）の二つのユニークな文化伝統が、インド洋に臨むアフリカ東部海岸地方で重なり、融合して、実り多い成果を生み出した。その触媒となったのは、イスラームだった。7世紀末には、東部海岸地方にイスラームは届けられており、おそらく12～13世紀以後、少なくとも名目上は大部分の地域でイスラームへの改宗があったことと思われる。

東部海岸地方とは、ソマリア南部からモザンビーク北部までのインド洋沿岸地域、およびその周辺に点在する多数の島嶼が含まれるが、その支配層は、たとえばアフリカに在住していても、自分は「アラブ」であり、「アラブ」文明に属するものと考えていた。にもかかわらず、彼らは、アフリカの風土に根ざした新しく、独特な生活文化体系「スワヒリ文明」の熟成に参加していたのだった。これは、中世ヨーロッパ人が、たとえば自分を「ローマ系」で「ラテン文化」に属すると考えながらも、なおスペイン人であり、フランス人であったのと似ていなくもない。

町々は、その富をインド洋交易に負っていた。そして、その文化・文明に刺激を与えた最大の影響力は、何よりも東方交易に由来するものだった。その経済的繁栄もまた東方交易によって保証されたのである。しかし、それらの町々が依然としてアフリカ的性格を保っていたことも明らかである。住民の中核を構成したのは、「自由民」であり、同時に内陸出身のアフリカ諸部族に出自する人々、あ

るいは、もはや特定の部族に出自を辿ることの出来なくなった「奴隷」たち、そして「アラブ」や「シーラーズ」の血統を主張しながらも、実際には海岸地方に生まれた混血のアフリカ人だった。彼らは、アフリカとアジアの、新たな混交の文明、ハイブリッドな価値観、生活様式を生じさせたが、それはアフリカの土壤が紡ぎあげたものだった。

ポール・マルティが、アフリカのイスラームについて、次のように述べているのは、われわれにとって十分示唆的である。「回教の教義は極めて簡単で、受け入れ易いとはいえ、黒人のためにまとめられたものではない。黒人たちは回教を自分たちの尺度で再構成し、彼らの好みに応じてまとめあげたのである。」⁽¹⁾ マルティによれば、アフリカの異教的心性と農耕生活がイスラームを変形させるに至ったと言うのである。

では、海岸地方のイスラームはどのようなものであっただろうか。海岸地方の生活には、西アフリカを想起させるものがあるといわれる。イブン・バットゥータはキルワの住民の中に、顔に傷を付けて飾りにしている風習（瘢痕文身）などアフリカ的特徴を記している。それぞれの国家は、権力の象徴として、大太鼓や象牙の角笛を大切にしていた。それらは力を秘めており、住民の魂を宿していると信じられたのである。さらに太鼓や笛の管理者は女性だった。迷信（*ushirikiana, uramali*）やタブー（*mwiko*）も多く、商売や旅行に際して吉兆を占うこともあった。地域によっては、妖術（*uchawi*）が盛んで、薬草や毒を使用、人の殺害、危害、財産への呪いに使われた。また、ジン（*majini*）や生き霊（*mazimwi*）、姿は見えないが、夜間に集会を開き、墓地などで死肉を食うという魔女（*wanga*）への恐れ、祖先を祭る儀礼（*tambiko*）を行い、祖霊（*mzimu*）の宿る場所に出かけ、願をかけ、金品を差し出すこともあった。

海岸地方の諸都市の中で、パテはおそらく最も富裕といえる時期があった。先の『アル・インキシャフィ』に明らかなように、貴族たちは銀の梯子を上って、象牙の寝床にもぐり込むとの言い伝えは語り草になった。だが、その詩では、金持ち連中が、民衆の注視の中で長い首を弓のようにそらし、大勢でつないだ腕を振っている様が描かれているが、それはアフリカ的な行動の理想ではあっても、アラブ的なものではなかった。ポルトガル人が発見した都市の中には、アフリカ的な、非アラブの王制を持つものもあった。

そんなわけで、イスラームの伝播・受容によっても、一般の人々がどこまでアラブ・イスラームの風習に影響されたかは、容易に判断はできない。ことに内陸に住む人々は、たとえ海岸地方の繁栄に惹きつけられたとしても、必要な交易以

外に、どんな点でも海岸文明の影響下には入らなかったかもしれない。海岸地方では、もともと魔術信仰が栄えていた。特にペンバ島はそのことで現在でも有名である。妖術師の影響も強かった。スワヒリ社会は「名目的にはイスラームでも、基層的には、精霊と吸血鬼への畏怖が染み付いていた」⁽²⁾のである。

時代は下るが、19世紀のバガモヨでさえ、アフリカの心性にみち満ちていた。当時この町は繁栄の最盛期にあたり、人口は約6,000を数えたという。1898/99年のキャラバン数1,305。44,144人の一行。30,253の商品。一日に二つの隊商が出たという。一つの隊商は300人以上からなる。そのバガモヨを称える隊商の歌がある。⁽³⁾

歓喜せよ、わが魂よ、苦労は忘れよ
憧れの場所は近いぞ
椰子の木茂る町、バガモヨよ。

汝、真珠の町を想い描けば
遠くにありて、どれほど心は疼いたことか
幸せの町、バガモヨよ。

女たちは、髪の毛を分け飾り
年中、椰子酒が愉しめる
愛の園、バガモヨよ。

帆を翻し、ダウ船が寄り集い
Uleiasの財宝を積み込む
バガモヨの港よ。

おお、踊りを見るは楽しからずや
愛しき乙女たちが、からだを揺さぶる
バガモヨの夜よ。

こころ安らかなれ、悩みは失せていく
打ち鳴らす太鼓、はずむ悦び
おお、バガモヨは近いぞ。

以下では、このバガモヨについてももう少し詳しく説明しておこう。バガモヨは、タンザニアのダルエスサラームから65キロほど北に位置する、インド洋に臨む小さな村である。そこは、かつてはD. リビングストン、H. スタンレー、R. パートン、J.H. スピークら、19世紀の著名なヨーロッパ人探検家たちが内陸に向けて旅立つスタート地点であり、同時に内陸各地との奴隷・象牙取引、ことにいわゆる、その「中央ルート」の発着の地でもあった。バガモヨ (Bagamoyo) という地名の語源は、先に紹介した隊商の歌、その歌詞からも明らかなように、困難きわまる内陸への旅に従事した人々の、この海岸町への思いを如実に表したものだ。 *Bwaga moyo*、つまりスワヒリ語で「こころ安らかにせよ」あるいは「(長い旅の後で) こころの重荷を降ろせ」の意だという。

この海岸の小村に初めに住みついたのは、おそらくバンツー語系の非イスラームの農民や漁民であっただろう。考古学的な証拠から、18世紀初めには、南のダルエスサラームからイスラーム化した別のバンツー語系部族 (Washomvi) が到来して、先住勢力を配下に置き、同地の支配権を握ったらしい。彼らは12人の首長の下でバガモヨを分割統治し、先住民からは貢納を求め、インド人の隊商には税を課したという。18世紀後半、あるいは19世紀はじめには、彼らはバガモヨの支配層にまで成長していた。イスラームが新旧の政治・文化集団を再編成する新しい社会的な力として機能したのだった。この新勢力は、ザンジバルのスルタンの権力にも屈することはなかった。19世紀を通じて、バガモヨの支配層は、近隣のザラモ人の首長権力と連携して、自らの統治権を維持したのである。18世紀後半、北からのカンバ人の攻撃で脅かされたとき、バガモヨの支配層は、(イスラーム化した) ザラモ人やドエ人と提携して、非イスラームのカンバ人を迎え撃ったのだった。ここでも、いわば「イスラーム連合」がその強靱さを証明したのである。

バガモヨには、もちろんアラブ人もいて、彼らが富裕な商人層を形成した。ほかに、ザンジバルのスルタンの傭兵となったバルチ人やインド人商人(ヒンドゥー教徒もイスラーム教徒もいた) がおり、少数のカトリックのゴア人もいた。一方、アフリカ人としては、ザラモ (Wazaramo)、ルグル (Waluguru)、カミ (Wakami)、クウェレ (Wakwere)、ジグア (Wazigua)、ドエ (Wadoe) などのバンツー語系の諸部族がいた。彼らは自らの中央権力機構を持たず、たがいの間で自在に混交していた。バガモヨの伝統経済は干し魚、ゴム、コパール、塩の生産にかかっていたが、19世紀に入ると象牙と奴隷取引にかかわる大陸側の最大の集散地と

なった。肥沃な農耕地にも恵まれ、飢饉に見舞われることもなく、地形的にも外側からの攻撃を免れた。バガモヨは、ますます拡大する隊商に十分な食料と商品を提供できる場所だったのである。

その結果、バガモヨへは近隣の後背地からさまざまな部族的背景をもつ人々が、あるいは飢饉を逃れ、あるいは部族間の抗争を避けて流れ込んできた。長距離交易に従事した内陸のニヤムウェジ、スクマ、マニエマなどの人々も、通常、半年間は *kampi mbaya* (「ひどいキャンプ地の意」) といわれた特別な一角に住みついたり、なかには漁師や農民、製塩工になって、バガモヨの地で結婚の相手を見つけ、定住する者もあった。

バガモヨでの生活は、多かれ少なかれ、イスラームの生活様式、その価値観との触れ合いを意味した。コフィア (*kofia* イスラム帽)、カンズ (*kanzu* 普通は白色の貫頭衣)、シュカ (*shuka* キヤラコの腰巻)、ブイブイ (*buibui* 女性がまとう黒衣) といったイスラーム教徒の衣装が日常風景となった。それらは、伝統的な民族衣装に代わるステイタス・シンボルとなったのである。こうして、バガモヨはかつての地方的な村、同質的な社会から、多部族混住の賑やかな商業都市へと発展したのである。住民はさまざまな部族で構成されたが、生活様式と価値観は齊一化へと向かい、やがて「スワヒリ的特質」「スワヒリであること」(*Uswahili*) と呼べるような文化的融合を遂げたのであった。

以上、図式的な説明ではあるが、こうした歴史的プロセスこそは、本稿で「スワヒリ形成」(*Swahili Making = Uswahili*) と呼んでいるものである。海岸地方の住民のなかには、こうした「スワヒリ形成」、換言すれば「スワヒリの民族統合」の渦中に身を置きながらも、なお自分は近隣・後背地、内陸の特定の部族の出自であることを主張したり、あるいはその記憶を失わない者もいたことだろう。とはいえ、彼らは都市化したバガモヨの文化との接触の機会が皆無か、あるいはその機会に乏しい内陸の人々 (*Watu wa Bara*) からは、おしなべて「他者」、つまり「海岸住民=スワヒリ人」(*Watu wa Pwani=Waswahili*) として見做されたのであった。⁽⁴⁾

バガモヨはただの一例にすぎない。バガモヨの歴史に見られるこれと似たプロセスは、おそらくイスラームの伝播以来、程度に差はあっても、東部海岸地方の各地で起きたことであろう。こうした「スワヒリ形成」「民族的統合」の過程で、イスラームは東部海岸地方の新しい形態に移し替えられ、アフリカとアジアの二つの文化伝統は、特色ある文明に完全に溶け込み、新しい創造へと高められたと言えるのである。

注

- (1) ユベール・デシャン、山口昌男訳『黒いアフリカの宗教』白水社、1963からの再引用。
- (2) G. マンユウ、上掲論文。
- (3) W.T. Brown, 1970の歌詞はA. Leuer, Bagamoyo, *Kolonialpolitik und Kolonialwirtschaft*, 1900からの再引用。スワヒリ語で歌われたものであるが、ブラウンによれば、原著者は、ドイツ語訳のみを紹介している。
- (4) 「スワヒリ形成」および「スワヒリ化」については、M. Miyamoto, 1990を参照されたい。このほか、奴隸商人ティップ・ティプ (Tippu Tip) の隊商記録によっても、海岸地方と内陸を対照させて、当時の生活風土を知ることが出来る。W.H. Whitely, 1958/59. なお、M. Miyamoto, 1990は、主にこの隊商記録を資料として「海岸」(Pwani) と「内陸」(Bara) の価値観を比較分析している。

[参考文献 (外国語)]

- Abdallah bin Hemedi 'Ajjem, 1962, *Habari za Wakilindi*, East African Literature Bureau (Allen, J.W.T. ed., 1963, *The Kilindi*, East African Literature Bureau)
- Abdulaziz, M.H., 1979, *Muyaka : 19th Century Swahili Popular Poetry*, Kenya Literature Bureau
- Abel, M., 1938, Die Arabische Vorlage des Suaheli-Epos *Chuo cha Herkal*, *Zeitschrift für Eingeborenen Sprachen*, 18
- Allen, J.de V., 1974, *Lamu Town: A Guide* (Published by the author, Lamu)
- Allen, J.de V., 1993, *Swahili Origins : Swahili Culture & the Shungwaya Phenomenon*, James Currey (and others)
- Allen, J.W.T., 1950, TENZI, *Tanganyika Notes and Records*, 28
- Allen, J.W.T., 1959, The Collection of Swahili Literature and its Relation to Oral Tradition and History, *Tanganyika Notes and Records*, 53
- Allen, J.W.T., 1971, *Tendi: Six Examples of a Swahili Classical Verse Form with Translations & Notes*, Heinemann
- Alpers, E.A., 1967, *The East African Slave Trade*, East African Literature Bureau
- Arnold, R., 1973, Swahili Literature and Modern History: A Necessary Remark on Literary Criticism, *Swahili*, 42/2, 43/1

- Barbosa,D.,1970, *A Description of the Coasts of East Africa and Malabar in the Beginning of the Sixteenth Century translated from an Early Spanish Manuscript in the Barcelona Library with Notes and Preface by Henry E.J. Stanley*, London. (Originally published in 1512)
- Beech, W.H.,1914, *Aids to the Study of Kiswahili: Four Studies Compiled and Annotated*, Kegan Paul, Trench, Trubner & CO. LTD.
- Besha, Ruth, 2000, The Swahili Dialect of Marodoka, Nosy Be Madagascar, *Journal of Swahili and African Studies*, Supplement no.1, Osaka University of Foreign Studies
- Broomfield, G.W., 1931, The Re-Bantuization of the Swahili Language, *Africa*, IV /1
- Brown, W.T.,1970, Bagamoyo: A Historical Introduction, *Tanzania Notes and Records*, 71
- Burton, R.F., 1872, *Zanzibar: City, Island and Coast*, vol. 1,2,Tinsley Brothers, Johnson Reprint Corporation, 1967.
- Chimera,R.,1998, *Kiswahili: Past,Present & Future Horizons*, Nairobi University Press
- Chittick, H.N., 1959, Notes on Kilwa, *Tanganyika Notes and Records*,53
- Chum,Haji, 1994, *Msamiati wa pekee wa Kikae (Kae Specific Vocabulary)* , Nordic Association of African Studies, Uppsala
- Coupland,R., 1938, *East Africa and its Invaders: From the Earliest Times to the Death of Seyyid Said in 1856*, Oxford University Press
- Davidson, Basil, 1964, *The African Past: Chronicles from Antiquity to Modern Times*, Longmann & Green (貫名美隆訳『アフリカの過去－原典集－古代から現代まで』理論社、1967)
- Doke, C.M., 1938, The Earliest Records of Bantu, *Bantu Studies*,12/2,
- Eastman, Carol M., 1971, Who are the Waswahili ?, *Africa*, vol. XLI/3
- Fitzgerald, W.W.A.,1898, *Travels in the Coastlands of British East Africa and the Islands of Zanzibar and Pemba: Their Agricultural Resources and General Characteristics*, Chapman and Hall, repr. 1970, Dawsons of Pall Mall
- Freeman-Grenville, G.S.P., 1959, Some Problems of East African Coinage: From Early Times to 1890, *Tanganyika Notes and Records*, 53
- Freeman-Grenville, G.S.P., 1960, *Historiography of the East African Coast*,

Tanganyika Notes and Records, 55

Freeman-Grenville, G.S.P., (ed.) ,1962, *The East African Coast: Select Documents from the First to the Earlier Nineteenth Century*, Oxford University Press

Freeman-Grenville, G.S.P.,1963, *The Coast,1498-1840* (in Oliver, R. & Mathew, G.,ed.,1963)

Freeman-Grenville,G.S.P. (ed.& tr.) , 1980, *The Mombasa Rising against the Portuguese,1631 from Sworn Evidence*, Oxford University Press

Freeman-Grenville,G.S.P.,1998,*The Swahili Coast, 2nd to 19th Centuries: Islam, Christianity and Commerce in Eastern Africa*, Variorum Reprints

Ghaidan, Usam, 1975, *Lamu: A Study of the Swahili Town*, East African Literature Bureau

Ghaidan, Usam, 1976, *Lamu: A Study in Conservation*, East African Literature Bureau

Gray, John, 1947, Kilwa in 1812, *Tanganyika Notes and Records*, 24

Gray, John, 1951, A History of Kilwa (Part 1) , *Tanganyika Notes and Records*,31

Gray, John, 1952, A History of Kilwa (Part 2) , *Tanganyika Notes and Records*,32

Gray, John,1962, *History of Zanzibar from the Middle Ages to 1856*, Oxford University Press

Gray, John, 1964, Visit of a French Ship to Kilwa in 1527, *Tanganyika Notes and Records*, 63

Greenberg, J.H., 1955, *Studies in African Linguistic Classification*, Compass Press

Greenberg, J.H., 1963, *Languages of Africa*, Indiana University Press

Guwi, Ally Kassim, 2003, *Historia ya Kilwa na Utamaduni wa Wakazi*, Tanzania Publishing House

Haj, Maulid M., 2001, *Sowing the Wind: Zanzibar and Pemba before Revolution*, The Gallery Publications, Zanzibar

Harries, Lyndon, 1951, Swahili Epic Literature, *Tanganyika Notes and Records*, 30

Harries, Lyndon,1962, *Swahili Poetry*, Oxford University Press

Harries, Lyndon, (ed.) , 1965, *Swahili Prose Texts: A Selection from the*

- Material collected by Carl Velten from 1893 to 1896*, Oxford University Press
- Harries, Lyndon, 1970, Translating Classical Literature into Swahili, *Swahili*, 40/1
- Havelock, H., 2000, *Tippu Tip: The Story of his Career in Zanzibar & Central Africa*, narrated from his own accounts by Dr. Heinrich Brode, translated from Arabic, The Gallery Publications, Zanzibar
- Hichens, William, 1972, *Al-Inkishafi: The Soul's Awakening*, translated from the Swahili Texts and edited, Oxford University Press
- Hill, Trevor, 1973, The Primary Dialects of Swahili: An Approach to a Linguistic-Geographical Survey, Part 1, *Swahili*, 43/2
- Hino, Shunya, 1968 (a), Social stratification of a Swahili town, *Kyoto University African Studies*, 2
- Hino, Shunya, 1968 (b), The occupational differentiation of an African town, *Kyoto University African Studies*, 2
- Hino, Shunya, 1968 (c), The costume culture of the Swahili people, *Kyoto University African Studies*, 2
- Horton, Mark & Middleton, John, 1998, *The Swahili: The Social Landscape of a Mercantile Society*, Blackwell
- Ibrahim Noor Shariff, 1973, Waswahili and their Language: Some Misconceptions, *Swahili*, 43/2
- Ingham, Kenneth, 1965, *A History of East Africa*, Frederick A. Praeger Publishers
- Issa bin Nasser Al-Ismaily, 1999, *Zanzibar, Kinyang'anyiro na Utumwa*, (Published by the author, Sultanate of Oman)
- Johnson, F. & Dundas, C., 1930, *Zamani mpaka Siku Hizi*, London
- Johnson, F., 1939, *A Standard Swahili-English Dictionary*, Oxford University Press
- Jones, R. & Doke, C.M. (ed.), 1940, *Diwani ya Muyaka bin Haji al-Ghassanyi*, Witwatersrand University Press
- Kezilahabi, E., 1972, The Development of Swahili Poetry: 18th – 20th Century, *Swahili*, 42/2, 43/1
- Kirkman, James, 1975, *Gedi*, Museum Trustees of Kenya
- Knappert, Jan, 1966, Notes on Swahili Literature, *African Language Studies*, 7

- Knappert, Jan, 1967, *Traditional Swahili Poetry: An Investigation into the Concepts of East African Islam as reflected in the Utenzi Literature*, E.J.Brill
- Knappert, Jan, 1970, Social and Moral Concepts in Swahili Islamic Literature, *Africa*, XL/2, International African Institute
- Knappert, Jan, 1971, *Swahili Islamic Poetry*, vol. 1,2,3, E.J. Brill
- Knappert, Jan, 1979, *Four Centuries of Swahili Verse: A Literary History and Anthology*, Heinemann
- Krumm, B.,1932, *Wörter und Wörtformen orientalischen Ursprungs in Suaheli*, Hamburg
- Lanchester, H.V., 1923, *Zanzibar: A Study in Tropical Town Planning*, ED.J.Burrow & COLTD.
- Lyne, R.N., 2001, *Zanzibar, In Contemporary Times: A Short History of the Southern East Africa in the Nineteenth Century*, The Gallery Publications, Zanzibar
- Madan, A.C., 1903, *Swahili-English Dictionary*, Oxford University Press
- Marsh, Z.A. & Kingsnorth, G.W.,1965, *An Introduction to the History of East Africa*, Cambridge University Press
- Martin,C.M.P. & Martin,E.B., 1973, *Quest for the Past: An Historical Guide to the Lamu Archipelago*, Marketing and Publishing Ltd.
- Martin, E.B., 1973, *The History of Malindi: A Geographical Analysis of an East African Coastal Town from the Portuguese Period to the Present*, East African Literature Bureau
- Mazrui Ali A. & Alamin M.,1995, *Swahili State and Society: The Political Economy of an African Language*, East African Educational Publishers, James Currey
- Middleton J., 1992, *The World of the Swahili: An African Mercantile Civilization*, Yale University
- Miyamoto, Masaoki, 1990, A Socio-Linguistic Approach to Swahilization-Coast vs.Up-Country, 崎山理、佐藤昭裕 (編集代表)『アジアの諸言語と一般言語学』(西田龍雄先生還暦記念論文集)、三省堂
- Morgan, J.C.,1940, The *Ngalawa* of the Kilwa Coast, *Tanganyika Notes and Records*, 9

- Mwangomango, J.S.M., 1970, *Kiswahili Karne ya Ishirini*, *Swahili*, 42/1
- Nicholls, C.S., 1971, *The Swahili Coast: Politics, Diplomacy and Trades on the East African Littoral 1798-1856*, George Allen & Unwin LTD.
- Nurse, D. and Spear, T. 1985, *The Swahili: Reconstructing the History and Language of an African Society 800-1500*, University of Pennsylvania
- Ohly, Rajmund, 1973a, The Dating of Swahili Language, *Swahili*, 42/2, 43/1,
- Ohly, Rajmund, 1973b, A Historical Approach to Swahili Literature: as Heretofore an Open Question, *Swahili*, 43/2
- Ohly, R., 1975, Mshenzi: The Barbarian, *Kiswahili*, 45/2
- Ohly, Rajmund, 1982, *Swahili : The Diagram of Crises*, *Afrikanistik*, Band 15, Universität Wien
- Oliver, R., (ed.), 1961, *The Dawn of African History*, Oxford University Press (邦訳、川田順造訳、1962、『アフリカ史の曙』岩波書店)
- Oliver, R. & Mathew, G.(ed.), 1963, *History of East Africa I*, Oxford University Press
- Periplus Maris Erythrae* (年代著者不明 村川堅太郎訳注『エリユトゥラー海案内記』中央公論社、1993)
- Prins, A.H.J., 1959, Uncertainties in Coastal Cultural History: The “Ngalawa” and the “Mtepe”, *Tanganyika Notes and Records*, 53
- Prins, A.H.J., 1965, *Sailing from Lamu: A Study of Maritime Culture in Islamic East Africa*, Assen
- Prins, A.H.J., 1967, *The Swahili-Speaking Peoples of Zanzibar and the East African Coast (Arabs, Shirazi and Swahili)*, International African Institute, London
- Reusch, R., 1953, How the Swahili People and Language came into Existence, *Tanganyika Notes and Records*, 34
- Saada Salim bin Omar, 1940, The Swahili Life, *Tanganyika Note and Records*, 9
- Said-Reute, E., 1888, *Memoiren einer Arabischen Prinzessin*. (G.S.P. Freeman-Grenville, ed., 1994, *Memoirs of an Arabian Princess, Emily Said-Reute, Princess Salme bint Said ibn Sultan al-Bu Saidi of Oman and Zanzibar*, East-West Publications)
- Salim, A.I., 1973, *The Swahili-speaking Peoples of Kenya's Coast 1895-1965*, East African Publishing House

- Shaibu Faraji bin Hamed Al-Bakariy Al-Lamuy,1938, *Khabar Al-Lamu: A Chronicle of Lamu* (Transliterated and translated from the Swahili script and annotated by William Hichens) , *Bantu Studies*, 12/ 1
- Shaykh Al-Amin bin 'Ali al-Mazrui, 1995, *The History of the Mazrui Dynasty of Mombasa*, Oxford University Press
- Sheriff, A.,1987, *Slaves, Spices & Ivory in Zanzibar: Integration of an East African Commercial Empire into the World Economy, 1770-1873*, James Currey (and others)
- Sheriff, A. (ed.) , 1995, *The History & Conservation of Zanzibar Stone Town*, James Currey
- Shorter, Aylward, 1974, *East African Societies*, Routledge & Kegan Paul
- Steere, E., 1870, *Swahili Tales, as told by Natives of Zanzibar*, Bell & Daldy (宮本正興・鈴木優梨子訳『スワヒリの昔話』同朋舎、1983)
- Stigand, C.H.,1913, *The Land of Zinj: Being an Account of British East Africa, its Ancient History and Present Inhabitants*, Constable & Co.
- Stigand,C.H., 1915, *A Grammar of Dialectic Changes in the Kiswahili Language*, Cambridge University Press
- Strandes, Justus, 1961, *The Portuguese Period in East Africa*, Kenya Literature Bureau
- Sutton, J.E.G.,1970, *Dar es Salaam: A Sketch of a Hundred Years*, *Tanzania Notes and Records*, 71
- Sutton, John E.G.,1990, *A Thousand Years of East Africa*, British Institute in Eastern Africa, Nairobi
- Sutton, J.E.G., 1996, *The East African Coast: An Historical and Archaeological Review*, East African Publishing House
- Swartz, M.J.,1991, *The Way the World Is: Cultural Processes and Social Relations among the Mombasa Swahili*, University of California
- Tolmacheva, M., 1993, *The Pate Chronicle*, Michigan State University
- Trimingham, J.S., 1964, *Islam in East Africa*, Oxford University Press
- Werner, A., 1918, *Swahili Poetry*, *Bulletin of the School of Oriental Studies*, 1/2 (五島忠久氏による日本語訳が、同氏による Werner,A.1930 の日本語訳に併録されている)
- Werner, A., 1921/22, *Utendi wa Ayubu*, *Bulletin of the School of Oriental (and*

- African Studies*, 1/1, 2/2, 2/3, London
- Werner, A., 1930, *Structure and Relationship of African Languages*, Longmans & Green. (五島忠久訳『アフリカ諸言語の構造と関係』三省堂、1944)
- Werner, A., 1932, *The Story of Miqdad and Mayasa from the Swahili-Arabic Text*, The Azania Press
- Whiteley, W.H., 1958/59, *Maisha ya Hamed bin Muhammed el Murjebi yaani Tippu Tip kwa maneno yake mwenyewe*, East African Literature Bureau
- Whiteley, W.H., 1969, *Swahili: The Rise of a National Language*, Methuen & CO. LTD.
- Willis, J., 1993, *Mombasa: The Swahili and the Making of the Mijikenda*, Oxford University Press
- Yajima, Hikoichi, 1996, Some Problems on the Formation of the Swahili World and the Indian Ocean Maritime World, *Essays in Northeast African Studies, Senri Ethnological Studies*, 43, National Museum of Ethnology, Osaka

【参考文献（日本語）】

- 上岡弘二、家島彦一、1979、『インド洋西海域における地域間交流の構造と機能－ダウ調査報告2』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 西江雅之、1974、「スワヒリの詩－ムワナ・クポナの詩」『月刊言語別冊：アフリカの文化と言語』大修館書店
- 西野太郎、2003、「アラビア語写本『キルワの情報に関する慰めの書』についての基礎的研究」(中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士前期課程修士論文)
- 前嶋信次、1968、『イスラム世界』河出書房新社
- 宮本正興、1972、「スワヒリ文学の発生と展開」『文学』1972年6月号、岩波書店
- 宮本正興、1989、『スワヒリ文学の風土』大阪外国語大学アフリカ研究室
- 宮本正興、1991a、『ことば・文学・アフリカ世界』大阪外国語大学アフリカ研究室
- 宮本正興、1991b、『東アフリカ海岸地方の口承文芸とスワヒリ語諸方言の位相に関する研究』(昭和63年度～平成2年度科学研究費補助金研究成果報告書)、大阪外国語大学

宮本正興、1999、「東アフリカ海岸地方スワヒリ語の方言語彙学的研究－資料編」、
『東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシテイ
の構造』(平成8年度～平成10年度文部省科学研究費「国際学術研究」
成果報告書、研究代表者：宮本正興)、pp. 141～301、大阪外国語大
学

家島彦一、1991、「東アフリカ・スワヒリ文化圏の形成過程に関する諸問題」『ア
ジア・アフリカ言語文化研究』41、東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所

The Making of Swahili – An Approach to East African Maritime Culture

Masaoki MIYAMOTO *

Much has been said about the origin and development of the unique Arabo-African hybrid creations of East African coastal areas, i.e. the culture and language of the so-called Swahili peoples. But who are the *Waswahili* (Swahili peoples) ? How did the *Waswahili* and *Kiswahili* (Swahili language) come into existence ? It has always been difficult to give convincing and persuasive images for these basic questions. We could safely say that there are as many images and interpretations as scholars. Misconceptions and arbitrary proposals have always been in current even among scholarly circles all over the world. And this is not without reasons. There are no written materials by the local peoples themselves before 18th century, though the maritime community itself was first mentioned in a book, written probably in the 1st century by an Alexandrian anonymous Greek, *Periplus Maris Erythrae*. But after this, we can only get access to the sparse materials of the Arab historians or geographers of middle age (from 10th century onward). Written materials in European languages appeared only after the arrival of the first Portuguese to the East African littoral in 1498.

The author tried once to draw a tentative but broad sketching of the Swahili culture more than 30 years ago, focusing on the origin of the language and peoples with special concerns on literary development up to the time of the late Shaaban bin Robert of the 20th century. Present article tries to reconsider Swahili classical culture against the whole background of maritime activities, remarking on the creative drifts, with special interests in language and literature, as well as on the formative elements of women and slaves in the social innovation of the traditional community. New materials of the Swahili dialectic studies of the author, from Pate island to the north and Kilwa (Kilwa

Kisiwani, Kilwa Kivinje and Kilwa Masoko) to the south as well as the results of folkloric studies of the author for these 30 years are tentatively incorporated. Some parts of classic verses including *Al-Inkishafi*, *Utendi wa Ayubu*, *Utendi wa Mwana Kupona*, *Utendi wa Tabaraka* are cited with Japanese translations in order to grasp the intellectual feelings of the community.

The author inclines to believe that Swahili language and peoples originated around Kilwa first and urbanized Zanzibar took later the leading role of disseminating the language, especially in oral forms. It seems that northern areas, including Lamu or Pate, influenced little linguistically to the south of Mombasa, though it started and established the written tradition. Various evidences show that Bajuni people on the Somali coast seems quite distinctive in terms of language (Kitikuu) and self identity (Bajuni, i.e. non-Swahili) . They might possibly be the influential factors in the making of northern socio-linguistic cultures.